特別史跡　西都原古墳群発掘調査報告書　第１集

鬼の窟古墳

西都原２０５号墳

平成１２年３月

宮崎県教育委員会

特別史跡　西都原古墳群発掘調査報告書　第１集

鬼の窟古墳

西都原２０５号墳

平成12年3月

宮崎県教育委員会

序

西都原古墳群は、全国有数の規模を誇る巨大古墳群として昭和27年に国の特別史跡に指定されました。さらに、昭和40年代には「風土記の丘」整備事業の第1号として史跡整備の先鞭をつけ、以来自然景観と田園風景に調和した秀麗な古墳群として高い評価を受けてきました。

さて、県教育委員会では平成7年度より史跡池上曽根遺跡（大阪府）と共に文化庁の「地方拠点史跡等総合整備事業（歴史ロマン再生事業)」の助成を受け、新たな整備事業に着手することにいたしました。「風土記の丘」整備事業から四半世紀余りの時期を経て、再び全国に先駆けて整備事業に着手できましたことは、地元の皆様をはじめ関係者の熱意の賜であるとともに、古代史の謎を秘める西都原古墳群の存在が全国にも注目を集めている証拠といえます。

本書は、このうち整備のために平成7年度に調査した鬼の窟古墳と205号墳の調査報告書です。

この報告書が専門の研究者だけでなく、学校教育や社会教育の面にも広く活用されると共に、埋蔵文化財に対する認識と理解のための一助となることを期待しています。

発掘調査にあたって、深い御理解とご協力を賜った、調査指導の先生方、地元の西都市に対して、衷心から御礼を申し上げます。

平成12年3月

宮崎県教育委員会
教育長 笹山竹義

例　言

1　本書は、文化庁の補助を受け、県教育委員会が特別史跡西都原古墳群で平成７年度から実施している「地方拠点史跡等総合整備事業（歴史ロマン再生事業)」のうち平成７年度に発掘調査した鬼の窟古墳・205号墳の報告書である。なお鬼の窟古墳・205号墳の保存整備工事については「特別史跡　西都原古墳群発掘調査・保存整備概要報告書（Ⅰ)」（1996）で報告しているので割愛する。

2　発掘調査は県教育委員会が実施し、保存整備工事は県営繕課・県都市公園総合事務所に分任して実施した。実施設計・監理は(株)文化財保存計画協会に委託した。

3　本書の執筆・編集は、長津宗重が行った。

4　調査及び保存整備にあたっては、西都原古墳群保存整備指導委員会の委員や特別調査員の先生方に御指導をいただいた。また西都市、西都市教育委員会、県総合博物館西都原資料館には御協力いただき、記して感謝する。

5　調査で出土した遺物は、県埋蔵文化財センターにおいて保管している。

本　文　目　次

第Ⅰ章　序説 …… 1

第１節　調査及び整備に至る経緯 …… 1
第２節　遺跡の位置と環境 …… 3

第Ⅱ章　鬼の窟古墳発掘調査 …… 11

第１節　位置と現況 …… 11
第２節　発掘調査以前の状況 …… 11
第３節　墳丘と石室の調査 …… 11
第４節　石室出土の遺物 …… 14
第５節　小結 …… 22

第Ⅲ章　西都原２０５号調査 …… 27

第１節　位置と現況 …… 27
第２節　試掘調査以前の状況 …… 27
第３節　墳丘と周溝の調査 …… 27
第４節　周溝出土の遺物 …… 27
第５節　小結 …… 32

第Ⅳ章　まとめ …… 41

挿　図　目　次

第 1 図　西都原古墳群分布図 …… 5
第 2 図　男狭穂塚・女狭穂塚測量図 …… 10
第 3 図　鬼の窟古墳トレンチ配置図 …… 13
第 4 図　鬼の窟古墳横穴式石室遺物分布図 …… 15
第 5 図　鬼の窟古墳出土遺物実測図 …… 17
第 6 図　鬼の窟古墳出土土器実測図（Ⅰ） …… 19
第 7 図　鬼の窟古墳出土土器実測図（Ⅱ） …… 21
第 8 図　鬼の窟古墳出土土器実測図（Ⅱ） …… 23
第 9 図　西都原 205 号墳周溝実測図 …… 29
第 10 図　西都原 205 号墳出土土器実測図（Ⅰ） …… 31
第 11 図　西都原 205 号墳出土土器実測図（Ⅱ） …… 33
第 12 図　西都原 205 号墳出土土器実測図（Ⅱ） …… 34
第 13 図　西都原 205 号墳出土土器実測図（Ⅳ） …… 35
第 14 図　西都原 205 号墳周溝a群出土状況図 …… 40

表　目　次

鬼の窟古墳出土土器観察表（1） …… 24
鬼の窟古墳出土土器観察表（2） …… 25
鬼の窟古墳出土土器観察表（3） …… 26
西都原 205 墳出土土器観察表（1） …… 36
西都原 205 墳出土土器観察表（2） …… 37
西都原 205 墳出土土器観察表（3） …… 38
西都原 205 墳出土土器観察表（4） …… 39
西都原 205 墳出土土器観察表（5） …… 40
報告書抄録 …… 55

図　版　目　次

図版 1　西都原古墳群遠景（南から） …… 45
図版 2 ～ 9　鬼の窟古墳 …… 46 ～ 53
図版 10　西都原 205 号墳周溝出土土器 …… 54

第Ⅰ章　序説

第１節　調査及び整備に至る経緯

１　調査及び整備に至る経緯

西都原古墳群（西都市大字三宅）は、一ツ瀬川右岸の標高60ｍ（比高50ｍ）の洪積台地（東西２.6ｋｍ、南北４.２ｋｍ）に位置し、前方後円墳32基・円墳279基・方墳１基・地下式横穴墓10基・横穴墓12基で構成されており、４世紀～７世紀前半の古墳群である。男狭穂塚古墳・女狭穂塚古墳という九州最大規模の巨大古墳を有することから、当古墳群は日向の古墳時代（特に５世紀前半代）の核となった盟主古墳群であり、前方後円墳・三角縁神獣鏡・埴輪・甲冑・横穴式石室などにヤマト王権との連合政権的な密接な政治的関係が窺える一方では、地下式横穴墓という在地的面も有している。

当古墳群は大正元（1912）年～６年に県が東京帝国大学・京都大学などの考古学者で組織された調査団に調査を依頼し、全体のほぼ１割にあたる30基が発掘調査され、この調査は日本考古学史上本格的な調査であった。その結果、昭和９（1934）年には国の指定史跡に、同27年には特別史跡に指定され、同41～43年に「西都原風土記の丘」史跡公園として古墳と自然が調和した歴史的景観を維持・保存する形で整備された。特にＡ地区（前方後円墳群と円墳群で構成された第１古墳群）は「森の古墳群」、Ｂ地区（前方後円墳群で構成された第２古墳群）は「草原の古墳群」、Ｃ地区（円墳群と地下式横穴墓群で構成された第３古墳群）は「古墳間の散策」、というイメージで整備された。また大正年間の調査で出土した遺物を展示する県総合博物館西都原資料館は半地下式で建設し、説明板やベンチなどの施設はすべて自然の材料を利用し、電線も地下に埋設した。なお大正年間の調査以後は、地下式横穴墓１１基、横穴墓１２基を西都市教育委員会が調査しただけである。

しかし、整備後30年近くも経過し、遺跡の保存から活用という視点で、県教育委員会では平成５年度に「西都原古墳群保存整備検討委員会」を設置し、７年３月に「西都原古墳群保存整備活用に関する基本計画」をまとめた。そして県は平成７年度から５か年計画で文化庁の補助のもと「大規模遺跡総合整備事業（古代ロマン再生事業）」による整備のための発掘調査と古墳復元等の整備を進めている。なお平成９年度からは「地方拠点史跡等総合整備事業（歴史ロマン再生事業）」と呼称を変えた。

２　調査及び整備の経過

平成７年度　今回の保存整備の最初の古墳としては、当古墳群唯一の横穴式石室の石積みの緩みなどで石室内の入場が制限されていた鬼の窟古墳（第206号墳・６世紀後半～７世紀初頭の円墳）が選定され、併せて陪塚と考えられ大正元年に調査された第205号墳（鬼の窟古墳と同時期の円墳）も行うこととなった。保存整備に伴う発掘調査は鬼の窟古墳・第205号墳、大正５年の調査で倣製三角縁神獣鏡を出土した第13号墳（４世紀後半の前方後円墳）を行った。鬼の窟古墳の調査では外堤の外側に外堀が確認され、二重周溝を有することが明らかになると共に、横穴式石室の羨道部における木棺の存在が確認された。

第13号墳の西側周堀が確認され、地中レーダーでも内部主体は後円部の１基のみであった。保存整備は鬼の窟古墳の墳丘復元・横穴式石室の羨道部復元・周堀復元、第205号墳は墳丘復元・周堀復元を行った。また西都原資料館の隣に体験学習館として西都原古代生活体験館の建設に着手し、木造平屋・分棟方

式としてセミナー棟と実習棟の２棟構造である。

平成８年度　整備に伴い第13号墳の継続調査、酒元ノ上横穴墓群（７世紀前半の横穴墓群）の調査に着手した。第13号墳は後円部の３段築成が確認され、大正年間に調査された粘土槨の墓壙を含めた調査を行った。酒元ノ上横穴墓群で地中レーダーによって新たに確認された７号墓道の７－１号横穴墓の調査を行った。当年度は保存整備は行われず、整備が完了した鬼の窟古墳は４月から石室の特別公開として毎月第２・４土曜日及び古墳祭りなどのイベントが行われる日に行われ、多い日には1,800人もの見学者があり、平均300人である。現在は羨道部まで公開している。前年度から建設中の西都原古代生活体験館が土器作り・勾玉作り・古代食作りなどの体験ができる施設として完成した。

平成９年度　整備に伴い第13号墳の最終調査、酒元ノ上横穴墓群の継続調査を行った。その結果、第13号墳は主軸長79．５ｍの前方後円墳で、前方部・後円部とも三段築成で、テラスと墳頂部に小形の河原石を敷き詰めている。また二重口縁部の壺を後円部に巡らしていた。酒元ノ上横穴墓群では二重周溝の円墳を切る横穴墓の墓道が２つ検出された。整備は第13号墳の墳丘復元・周堀復元、模型（スケール１／20）設置を、鬼の窟古墳の外堀復元・外堤断面土層展示を行った。なお西都原古代生活体験館が７月12日にオープンし、夏休み中の８月には体験者2,435人、見学者3,591人、合計6,026人と大いに賑わった。その相乗効果で西都原資料館も4,667人と前年の3,660人の39％増と大きく伸びた。

平成10年度　整備に伴い大正元年の調査で国の重要文化財である子持家形埴輪・舟形埴輪を出土した第169号墳（５世紀前半の円墳）、当古墳群唯一の方墳である第171号墳（５世紀前半の方墳）の調査に着手した。両古墳とも葺石・埴輪列が検出され、特に171号墳は葺石の残存状態が良好である。第169号墳からは野中宮山古墳（大阪府）と類似の壺形埴輪が出土し注目された。整備は、第13号墳を含む周辺部そして、第202号墳（姫塚）周辺の環境整備を行い、酒元ノ上横穴墓群の保存覆屋施設の建設に着手した。

平成11年度　整備に伴い第171号墳の継続調査、箸墓類型の墳丘企画と推定されている第100号墳（４世紀代の前方後円墳）の調査に着手した。第171号墳は女狭穂塚古墳の外堀に近接していることが明らかになり、第100号墳は前方部二段・後円部三段築成で、二重口縁部の壺を後円部に巡らしていた。整備は第13号墳の内部主体見学施設、第171号墳の墳丘二段目葺石復元、酒元ノ上横穴墓群の保存覆屋施設の完成である。

3　調査組織

西都原古墳群保存整備指導委員会及び調査事務局の組織は次のとおりである。

西都原古墳群保存整備指導委員会

委員長	野口逸三郎	県文化財保護審議会委員長（平成７年度）
	日高正晴	宮崎考古学会長（平成８～11年度）
委員	大塚初重	明治大学名誉教授
	水野正好	奈良大学学長
	小田富士雄	福岡大学教授
	杉本正美	九州芸術工科大学教授
	柳沢一男	宮崎大学教授

	日高正晴　宮崎考古学会会長
顧問	斎藤　忠　大正大学名誉教授
事務局	宮崎県教育委員会
教育長	田原直廣（平成７・８年度）、岩切重厚（平成９年度）、笹山竹義（平成10・11年度）
教育次長	八木　洋（平成７年度）、川崎浩康（平成８～10年度）、新垣隆正（平成11年度）
教育次長	中田　忠（平成７年度）、河野　聚（平成８・９年度）、岩切正憲（平成10・11年度）
文化課長	江崎富治（平成７・８年度）、仲田俊彦（平成９～11年度）
課長補佐	田中雅文（平成７年度）、稲田憲男（平成８・９年度）、矢野　剛（平成10・11年度）
主幹兼庶務係長	高山恵元（平成７・８年度）、井上文弘（平成９～11年度）
予算編成担当	宮越　尊主査（平成７年度）、櫻木真治主事（平成８～10年度）、向井大蔵主査（平成11年度）
予算執行担当	横山幸子主任主事（平成７年度）、青木英子主査（平成８・９年度）、礒貝仁美主事（平成10・11年度）
埋蔵文化財係長	面高哲郎（平成７・８年度）、北郷泰道（平成９～11年度）
整備担当	北郷泰道主査（平成７年度）、長津宗重主査（平成８・９年度）、柳田宏一主査（平成８年度）、飯田博之主任主事（平成10・11年度）
調査担当	橋本英俊主事（平成７年度）、長津宗重主査（埋蔵文化財センター　平成７年度）、吉本正典主任主事（平成８年度）、石川悦雄主査（平成９年度）、日淺雅道主任主事（埋蔵文化財センター　平成９年度）、日高広人主事（埋蔵文化財センター　平成９年度）、松林豊樹主任主事（平成10・11年度）
調査協力	西都市教育委員会、西都市

第２節　遺跡の位置と環境

西都原古墳群は、県央部を流れる一ツ瀬川の右岸に広がる標高約12ｍの沖積平野部、標高約50ｍの西都原古墳群の主体が立地する西都原台地、その両者に挟まれた標高約20～26ｍの中間台地に分布する。西都原台地は九州山地から南東に向かって舌状に細長く伸びた洪積台地で、東側を流れる桜川と西側を流れる山路川に挟まれている。遺跡は西都原台地上に西都原古墳群以外に丸山遺跡、新立遺跡、西都原遺跡、寺原遺跡、原口第２遺跡などが、中間台地に堂子丸遺跡、法元遺跡、寺崎遺跡、上妻遺跡、酒元遺跡、諏訪遺跡（日向国分尼寺跡推定地）、日向国分寺跡、上尾筋遺跡、下尾筋遺跡などが分布する(1)が、沖積平野部は水田地帯で遺跡は確認されていない。

旧石器時代の遺物は出土していないが、**縄文時代**になると西都原台地上の丸山遺跡(2)で早期の集石遺構が検出され、第13号墳の西側の原口遺跡(3)では前平式土器が出土し、集石遺構１基が検出された。中期になると中間台地の上妻遺跡(4)では船元式土器が出土している。後期になると中間台地の寺崎遺跡(5)や上妻遺跡で後期土器が出土し、寺崎遺跡では晩期の黒色磨研土器や孔列土器も出土している。

弥生時代になると台地上の西都原遺跡(6)で後期の竪穴住居２軒、寺原第１・４遺跡(7)で終末期の竪穴住居３

軒、新立遺跡[8]で終末期から古墳時代初頭の竪穴住居が20軒検出されている。寺原第1遺跡の2軒の竪穴住居は方形プランを基調として複数の突出壁を有する花弁形間仕切り住居である。1号住居は6m×5.8m、2号住居は7m×6.5mである。中間台地の上妻遺跡で後期の竪穴住居1軒が検出され、寺崎遺跡では石包丁が出土している。以上のように当台地上は縄文時代早期から生活が営まれ、縄文時代中期から中間台地でも営まれるようになった。また台地上は新立遺跡のように弥生時代終末から古墳時代初頭まで集落が営まれた。しかし古墳時代になると台地上では寺原遺跡[9]で前期（4世紀代）の竪穴住居が14軒検出されるが、原口第2遺跡で後期の竪穴住居2軒検出されているのみで、集落の本体は中間台地におりている。なお中間台地上の堂子丸遺跡[10]では中央部に土師器の甕を据え付けて炉にした住居跡が1軒検出されている。

古墳時代になると当台地の東側の縁辺部で前方後円墳の造営が始まり、最終的には4世紀～7世紀前半の間に前方後円墳32基・円墳278基・方墳1基・地下式横穴墓10基・横穴墓12基造営している。当古墳群は分布で9グループ（標高30mの2グループ、60mの5グループ、70mの2グループ）に、時期で8つの画期に分かれる[11]（第1図）。

第一の画期は13号墳に倣製三角縁神獣鏡の分与が行われる前段階の3期[12]（4世紀前半）で、前半期には35・90・91号墳、後半期には1・56・72・95・99号墳が一ツ瀬川を東にのぞむ台地縁辺部に造営される。なお当古墳群からみおろす標高30mに集落（酒元遺跡・寺崎遺跡・法元遺跡など）は位置する。35号墳（主軸長73m）は台地端部の標高55mに位置し、後円部の内部主体は粘土槨で、武器（剣2・直刀1）・装身具（倣製方格規矩鏡1・勾玉2・管玉21）が出土した[13]。72号墳（同70m）は台地端部の標高63mに位置し、内部主体は後円部2（粘土槨1・礫床1）、前方部1（粘土槨1）である[14]。なお柳沢一男氏は墳丘規格の比較検討から81号墳を纏向類型に[15]、91・100号墳を箸墓類型の1期に、1・88号墳を西殿塚類型の2期に、72号墳を行燈山古墳類型の3期[16]に比定され、三世紀にまでさかのぼる可能性を指摘している。

第二の画期は13号墳に倣製三角縁神獣鏡の分与が行われる3期（4世紀後半）で、13・81・92・100号墳が相当する。13号墳は台地端部の標高57m（比高44m）に位置し、主軸が82.5m、後円部径43m、同高7.2m、頂径17m、前方部幅27m、同長41m、同高4.8m、くびれ部幅21mの前方後円墳で、葺石を有する。大正5（1916）年の調査によれば、内部主体は竪穴式石室ではなく長さ7.9mの粘土槨で、棺台の上に檜製木棺をおき、その上を粘土と河原石で被覆する構造である。棺の北部から武器（鉄剣1・刀子1）・装身具（鏡1・勾玉2・管玉40余り・ガラス小玉百数十個）が出土している[17]。出土した倣製三角縁獣文帯三神三獣鏡はヤマト王権中枢の特定の工房で集中的な生産が行われたと考えられており、ヤマト王権の国家的祭祀の場である沖ノ島18号陰遺跡（福岡県）と同笵[18]である。副葬品の年代から四世紀後半に比定されている。平成7～8（1995～96）年度に整備のための確認調査が県教育委員会によって行われており、墳丘の後円部・前方部とも三段築成で、周堀は西側で確認され、地中レーダーをもちいて観察したが、内部主体は大正5（1916）年に調査された1基だけである。また後円部の墳頂部から壺形埴輪が出土しており、四世紀後半の時期に属する[19]。

第１図　西都原古墳群分布図

第三の画期は男狭穂塚古墳が造営される４期（５世紀第１四半期）で、同古墳と46・83・88・109号墳が相当する。男狭穂塚古墳は台地中央部の標高69ｍ（比高54ｍ）に位置し、墳形については前方後円墳説や造り出し付き円墳説、全長についても211ｍ、167ｍ、148ｍなどの諸説があり、不明な点が多かった。しかし、平成９年の墳丘測量の結果、主円丘部径１３２ｍ、同高さ19ｍ、造り出し部長20ｍ、同幅50ｍ、同高さ4.5ｍ、全長148ｍで、主円丘部は三段築成で二重の周堀をもっているが、造り出し部端までめぐっていないので、造り出し付き円墳とみるべきことが判明した[20]。主円丘部径では女狭穂塚古墳よりも大きい。網干善教氏は墳丘規格から男狭穂塚古墳は古市古墳群（大阪府）の盟主墳である応神陵古墳の二分の一の規格であると指摘している[21]。男狭穂塚古墳のくびれ部から出土した円筒埴輪[22]は女狭穂塚やその陪塚とされる169・170号墳（Ⅲ期[23]の埴輪）の出土と同タイプである。この時期に巨大古墳を造営するために必要な土量を確保するために従来の墓域である台地端部から標高70ｍの山際（高取山）に墓域を移動しており、集落からみえなくてもよいほど勢力が安定・巨大化した最初の時期である。

第四の画期は当古墳群最大の前方後円墳である女狭穂塚古墳が男狭穂塚古墳に近接して造営される５期（５世紀第２四半期）である。この時期に複数の首長墓の系列から男狭穂塚古墳→女狭穂塚古墳に統一され、ほかの系列の前方後円墳の造営は中断される。女狭穂塚古墳は台地中央部の標高69ｍ（比高54ｍ）に位置し、全長176ｍ、後円部径96ｍ、同高さ15ｍ、前方部長92ｍ、幅109ｍ、同高さ13ｍで、後円部も前方部も三段築成で、くびれ部にそれぞれ造り出しをもち、幅20ｍの盾形の周堀と外堤を有する[24]。なお、平成10年度の調査で、西側に外堀が確認された。女狭穂塚古墳は九州最大（全国48番目）の前方後円墳で、網干善教氏は百舌鳥古墳群（大阪府）の盟主墳である履中陵古墳の二分の一[25]、柳沢一男氏は古市古墳群の盟主墳である仲津山古墳の五分の三の規格である[26]と指摘している。女狭穂塚古墳の後円部とくびれ部から出土した黒斑を有する円筒埴輪は外面の調整を基本的には横刷毛により仕上げており、その陪塚とされる169・170・171号墳出土の埴輪と同タイプで、畿内直系であり、Ⅲ期の埴輪である。円筒埴輪・朝顔形埴輪が主体であるが、形象埴輪には家・盾・冑・三角板革綴短甲・草摺などがある[27]。これらのことから五世紀第２四半期に比定される。169号墳は直径48ｍ、高さ７ｍの円墳で、墳頂部から舟・子持家・衝角付冑・眉庇付冑などの形象埴輪や壺形埴輪が出土している[28]。この舟形埴輪は準備造船を模しており、西都原古墳群の首長がこの舟にのってヤマト王権の畿内地方にわたったことを、子持家形埴輪は首長の居館の一建物を表現しているかもしれない。170号墳は直径45ｍ、高さ1.8ｍの異常に低墳丘の円墳で、墳頂部から切妻造りの家形埴輪が出土している[29]。当古墳群唯一の方墳である171号墳は、女狭穂塚古墳の外堀に接近し、一辺23ｍ、高さ4.5ｍの規模で、墳頂部から切妻造りの家・短甲・盾・蓋などの形象埴輪が出土している[30]。なお家形埴輪の網代に顔料が塗布されていることから、古市古墳群の埴輪を製作した土師の里遺跡（大阪府）との緊密な関係が指摘されている[31]。また男狭穂塚古墳・女狭穂塚古墳と中心とする古墳群と、台地縁辺部のあいだには、古墳のないかなり広い空白地帯が存在し、墓域の強い規制がうかがえる。

第五の画期は複数の甲冑を副葬した４号地下式横穴墓に代表されるように、小豪族が台頭し、定型化した古式の地下式横穴墓が出現する６～７期（５世紀後半）である。この地下式横穴墓は直径約29ｍの墳丘をもっており、昭和31（1956）年の調査によれば妻入り長方形プランの玄室の規模は長さ5.5ｍ、

幅2.2m、高さ1.6mで中央部に長さ3.5m、幅0.4mの屍床を有し、木棺を安置していた可能性がある。武具（横矧板鋲留短甲2・横矧板革綴短甲1）以外には屍床内から武器（直刀5・鉄鏃40）・装身具（珠文鏡1・勾玉1・管玉27・ガラス製丸玉115・ガラス製小玉64）・歩揺付金具などが出土している[32]。被葬者は首長の軍事的側面をになう階層（長）が想定される。この甲冑はヤマト王権で集中的に生産され配布されたと考えられており、この時期にヤマト王権による西都原勢力へのテコ入れがみられる。台地北端部の円墳の多くは地下式横穴墓の墳丘の可能性が大であり、4号地下式横穴墓の被葬者の系列およびその下位の構成員が埋葬されていると想定される。この地下式横穴墓は宮崎県の南部、鹿児島県・熊本県の一部に分布する南九州の在地の墓制であり、当古墳群はその北限である。この時期には台地上には前方後円墳は造営されていない。

第六の画期である8期（6世紀前半）は、首長墓が造営されておらず、在地の墓制である地下式横穴墓と円墳が引き続き造営された。この時期には地下式横穴墓の階層が変質され始め、副葬品が貧弱になり、追葬を意図した平入りプランに変化する。5世紀後半～6世紀前半は当台地上では前方後円墳は造営されていないが、台地下では松本塚古墳（5世紀末～6世紀初頭）や一ツ瀬川左岸の児屋根塚古墳・新田原古墳群のように前方後円墳の墓域が拡大する。

第七の画期は、鬼の窟古墳に横穴式石室が採用される9期（6世紀後半）で、再び前方後円墳が造営されるが、姫塚（202号墳・主軸長51m）、船塚（265号墳・同59m）のように主軸長が50～60mと規模が縮小する。

姫塚は標高61.5mに位置し、幅10mの盾形の周堀を有する。大正元（1912）年の調査では、後円部の頂上部から鉄器（直刀3・刀子1・鉄鏃）・装身具（勾玉1・切子玉10・管玉2・棗玉1・小玉1）・土器（須恵器・坏4・提瓶4）が、前方部からは鉄器（直刀1・刀子1・鉄鏃）・土器（須恵器・坏4）が出土し[33]、内部主体は木棺直葬の可能性がある。

一方、船塚は標高63mに位置し、前方部幅が後円部径より大きい。大正6年の調査では、後円部の頂上部から鉄器（直刀4・刀子2・鉾1・鉄鏃多数）・装身具（径11.5cmの異形乳文鏡1・管玉19）が出土した[34]。

6世紀後半の地下式横穴墓の玄室は追葬を意図した平入り長方形・楕円形プランで、天井はドーム形である。床面に河原石を敷くものと、敷かないものがある。円墳の際で発見されるので、墳丘を基本的に有するが、副葬品が須恵器・土師器を中心としており、五世紀後半の地下式横穴墓とは階層差が歴然である。

鬼の窟古墳は男狭穂塚・女狭穂塚古墳と、台地縁辺部の前方後円墳群との中間に位置し、直径37m、高さ7.3mの二段築成の円墳で、その周囲に幅8～9.7mの周堀が、さらにその周囲に幅8.4～9.8m、高さ2.6mの外堤を有する[35]。平成7年度の調査で、その外側には幅5m、深さ0.65mの周堀が巡ることが確認された。円墳の中心部に玄室が配置され、横穴式石室は南面している。両袖の石室の規模は玄室が長さ4.8m、幅1.75～2.45m、高さ2.15m、羨道部の長さは7.5m、幅1.8m、高さ1.8mである。七年度の調査で石室内から棺釘が出土したことから、組み合わせ式の箱形木棺が想定され、石室床面には全面に河原石が敷かれ、中央部に排水溝が設置されていた。耳環・鉄鏃・金銅装馬具金具・須恵器（坏・甕など）・土師器などが出土した[36]。

柳沢一男氏は平林古墳（奈良県）の石室と同タイプであり、畿内系石室と指摘している[37]。当古墳群唯一の横穴式石室で、県内でも20数例しかなく、明治時代に三浦敏氏が表採した須恵器（ＴＫ43[38]）から６世紀後半の時期と考えられていたが、調査で出土した須恵器はＴＫ209（６世紀末～７世紀初め）である。この時期には前方後円墳の造営は終了している。

第八の画期は、横穴墓が造営される10期（７世紀前半）の時期である。

酒元の上横穴墓群は、鬼の窟古墳の南300ｍにある谷の緩傾斜面（標高62ｍ）に位置する。平成６年度の圃場整備事業に伴う西都市教育委員会の調査で６墓道が検出され、そのうち３墓道は１墓道２穴のタイプである[39]。６号墓道は全長11.6ｍ、最大幅5.5ｍの、二等辺三角形プランで、床面は緩やかに下降している。一番奥に１号横穴墓を右側壁に２号横穴墓が造営している。２号横穴墓の玄室は平入り両袖楕円形プラン、ドーム天井で、長さ1.6ｍ、幅1.1ｍ、高さ0.9ｍの規模である。床面には川原石を敷き、熟年女性一体と共に刀子１・耳環２・須恵器坏６などが出土した。１号横穴墓は２号と同タイプであるが、玄室の規模が長さ3.2ｍ、幅２ｍ、高さ１ｍで２号の倍の規模である。これらはすべて出土した須恵器が陶邑編年のⅡ型式６段階であるので７世紀前半の時期に比定される。

また平成７・８年度には地中レーダーによって新たに確認された１墓道２穴タイプの７号墓道の7—1号横穴墓の調査で出土した須恵器の坏の分析によって魚類を副葬していたことが明らかになった[40]。９年度は二重周溝を有する円墳の外溝を切る横穴墓の墓道が二つ検出され、８号墓道も地中レーダーによって１墓道２穴タイプと確認された[41]。１号～７号墓道が斜面から長い墓道を掘り込むタイプであるのに対して8・9号墓道は平坦面から長い墓道を掘り込むタイプであり、地下式横穴墓がより容易に造営できるのに横穴墓に造営にこだわった集団の姿が見える。

以上のように日向における首長墓の変遷と中心とした古墳群の動態から、前期の生目古墳群、中期の西都原古墳群、後期の新田原古墳群という盟主古墳群の存在があきらかにされている。そのなかで西都原古墳群は男狭穂塚・女狭穂塚という巨大古墳造営後の中断はあるが、日向の古墳時代の核となった古墳群であり、前方後円墳・三角縁神獣鏡・埴輪・甲冑・横穴式石室などにヤマト王権との政治的な連合がうかがえる一方では、地下式横穴墓という在地的な面ももっていた。首長たちは権力の象徴としての古墳の代替として寺院を建立するようになり、上妻遺跡（西都市）で金剛宝戒寺（大分市）と同笵の白鳳様式の百済系軒丸瓦が出土していることから氏寺が想定されている[42]。これらの背景をもとに当地域は、以後、台地下に国府・国分寺・国分尼寺がおかれ、日向の古代における政治の中心となった。

（註）

（1）西都市教育委員会「西都市遺跡詳細分布調査報告書」昭和61年（1986）

（2）西都市教育委員会「西都原地区遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第22集 平成８年（1996）

（3）西都市教育委員会「原口遺跡」『西都の歴史』昭和51年（1976）

（4）宮崎県教育委員会「上妻遺跡」『国衙・郡衙・古寺跡等範囲確認調査概要報告書Ⅰ』平成４年(1992)

（5）宮崎県教育委員会「寺崎遺跡」『国衙・郡衙・古寺跡等遺跡詳細分布調査報告書Ⅲ』平成３年(1991)

(6) 註2文献に同じ

(7) 西都市教育委員会「寺原第1遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』昭和60年（1985）

(8) 西都市教育委員会「新立遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第18集 平成4年(1992)

(9) 註2文献に同じ

(10) 宮崎県教育委員会「童子丸遺跡」『国衙・郡衙・古寺跡等範囲確認調査概要報告書Ⅰ』平成4年(1992)

(11) 西都原古墳群の首長墓の変遷については下記の文献がある。

日高正晴「日向の古墳と西都原古代文化圏」『西都原古墳研究所年報』創刊号　昭和59年（1984）

北郷泰道「地域の古墳－九州南部（宮崎・鹿児島県）」『古墳時代の研究』10　平成2年（1990）

長津宗重「日向」『前方後円墳集成　九州編』平成4年（1992）

柳沢一男「日向の古墳時代前期首長墓系譜とその消長」『宮崎県史研究』第9号　平成7年（1995）

(12) 山川出版社『前方後円墳集成』平成3～6年（1991～1994）、4～10期も同じ。

(13) 宮崎県『宮崎縣県児湯郡西都原古墳調査報告』大正4年（1915）

宮崎県『宮崎縣西都原古墳調査報告書』大正6年（1917）

宮崎県『宮崎縣史蹟調査報告』第3冊　大正7年（1918）

(14) 註13文献に同じ

(15) 柳沢一男・有馬義人「宮崎県の古墳資料（2）」『宮崎考古』第14号　平成7年（1995）

(16) 柳沢一男「日向の古墳時代前期首長墓系譜とその消長」『宮崎県史研究』第9号　平成7年（1995）

(17) 註13文献に同じ

(18) 小林行雄「倣製三角縁神獣鏡の研究」昭和52年（1976）

(19) 宮崎県教育委員会『特別史跡西都原古墳群発掘調査・保存整備概要報告書（Ⅲ）』平成10年（1998）

(20) 宮崎県教育委員会『男狭穂塚女狭穂塚陵墓参考地測量報告書』平成11年（1999）第2図

(21) 網干善教「古墳築造よりみた畿内と日向」『関西大学考古学等資料室紀要』第2号昭和60年(1985)

(22) 福尾正彦「男狭穂塚陵墓参考地参拝所美化作業に伴う出土品」『書陵部紀要』第44号　平成5年（1993）

福尾正彦「男狭穂塚女狭穂塚陵墓参考地外周埒垣改修その他工事に伴う調査」『書陵部紀要』第47号　平成8年（1996）

(23) 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号　昭和54年（1978）

(24) 註20文献に同じ

(25) 註21文献に同じ

(26) 註16文献に同じ

(27) 福尾正彦「女狭穂塚陵墓参考地出土の埴輪」『書陵部紀要』第36号 昭和60年（1985）

(28～30) 註13文献に同じ

(31) 高橋克壽「西都原171号古墳出土の埴輪」『宮崎県史研究』第7号　平成5年（1993）

(32) 日高正晴「日向地方の地下式墳」『考古学雑誌』第43巻第4号　昭和33年（1958）

(33・34) 註13文献に同じ

(35) 柳沢一男「宮崎県の古墳資料（1）」『宮崎考古』第13号　平成6年（1994）

(36) 宮崎県教育委員会『特別史跡西都原古墳群発掘調査・保存整備概要報告書（Ⅰ）』平成8年（1996）

(37) 註35文献に同じ

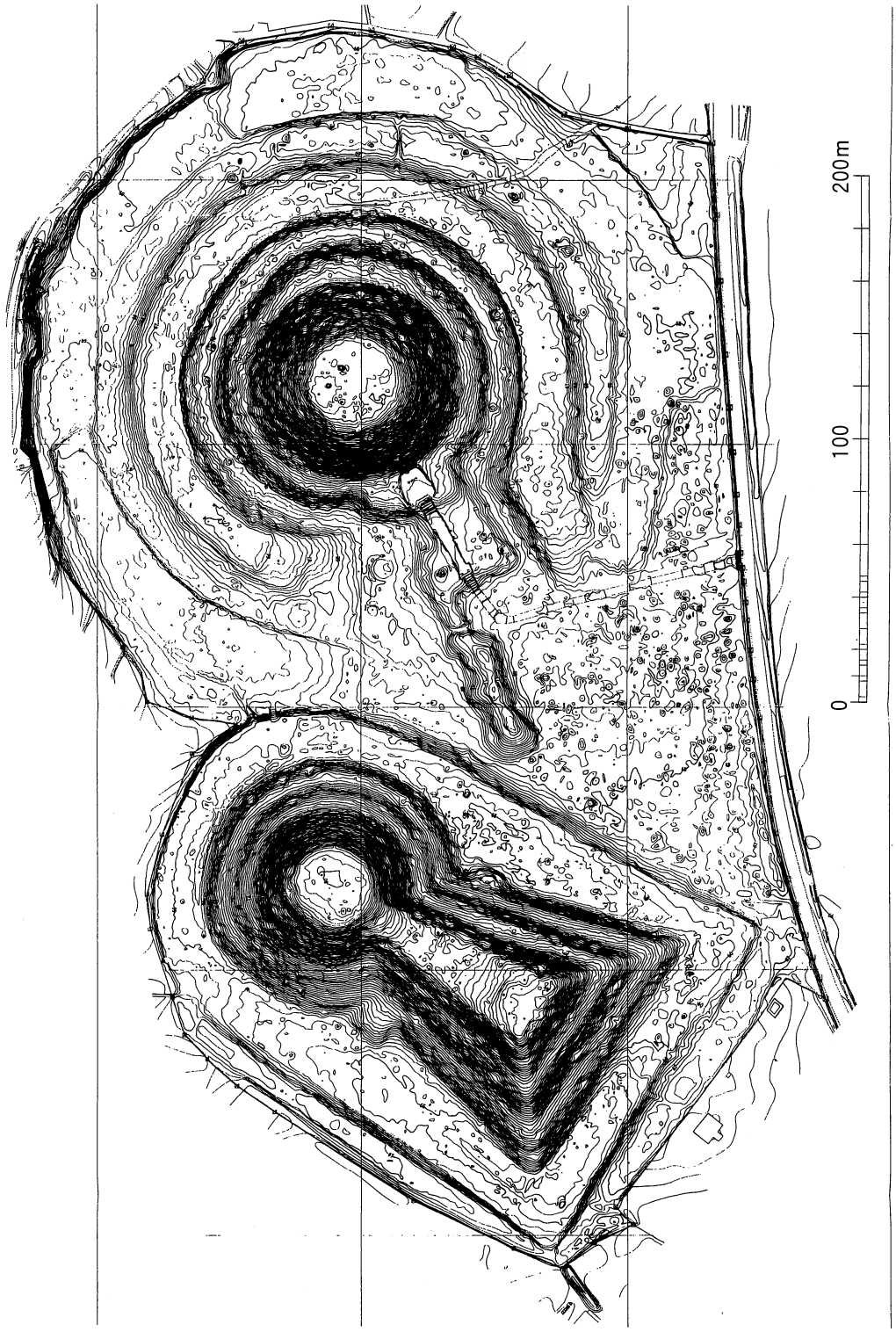
(38) 福尾正彦「宮崎県内の須恵器―地下式横穴・高塚古墳出土例を中心として―」『古文化談叢』第6集 昭和54年（1979）

(39) 註2文献に同じ

(40) 宮崎県教育委員会『特別史跡西都原古墳群発掘調査・保存整備概要報告書（Ⅱ）』平成9年（1997）

(41) 註19文献に同じ

(42) 宮崎県教育委員会「上妻遺跡」『国衙・郡衙・古寺跡等範囲確認調査概要報告書Ⅱ』平成5年(1993)



第2図　男狭穂塚・女狭穂塚測量図（註20文献）

第Ⅱ章　鬼の窟古墳発掘調査

第1節　位置と現況

鬼の窟古墳は直径37.0ｍ、高さ7.3ｍ、周囲に周堀と外堤を有する円墳で、内部主体は横穴式石室である。台地の縁の標高50～60ｍに前方後円墳が並ぶグループと男狭穂塚・女狭穂塚のグループとのほぼ中間の標高63～65ｍの緩やかな傾斜地に位置し、周囲には南東方向に古墳の中心の距離では約58ｍ、外堤裾から約14ｍ離れて第205号墳（直径11.4ｍ、高さ2.7ｍの円墳）がある。

第2節　発掘調査以前の状況

鬼の窟古墳（西都市大字三宅字酒元の上5012・5065）は西都原古墳群の最後の首長墓で、内部主体が唯一の横穴式石室である。古文書によれば江戸時代には開口しており、盗掘されていた。

明治5～21（1872～1888）年まで滞日していたゴーランドは『日本のドルメンとその築造者たち』で「日本で見つけたもののうち最も見事な例の一つ」として図面と一緒に紹介しており、その図面によれば円墳の周囲を外堤が完全に巡っている。大正年間の発掘調査の時には古い時期の古墳が対象であったために調査されなかったが、鬼の窟古墳の陪塚と考えられていた第205号墳は調査されている。なお当古墳の横穴式石室の羨道から三浦　敏氏が表採したという須恵器の坏蓋・身が宮崎県総合博物館に収蔵されており、ＴＫ43型式とＴＫ209型式の時期に比定されていた[(1)]。また墳丘測量と石室実測が昭和59（1984）年に西都市教育委員会[(2)]が、平成4（1992）年に宮崎大学教育学部[(3)]が行っている。

宮崎大学の墳丘測量によれば鬼の窟古墳は東西36.8ｍ、南北34.2ｍ、最大径37.0ｍ、最小径34.0ｍ、高さ7.3ｍの規模で、1段斜面と2段斜面の高さは約3.2ｍ、斜面長は6.5～7.2ｍ、テラス幅は約1.2～1.5ｍ、斜面角度は1段が25～34度、2段が25～30度である。墳裾の高さは最も高い北西部で64.2ｍ、最も低い南東部で63.2ｍで比高差が1ｍである。その周囲に幅8.0～9.7ｍの周堀が、更にその周囲に基底部幅8.4～9.8ｍ、高さ2.6ｍ、断面形の台形の外堤が巡る。外堤外径は東西73.1ｍ、南北72.0ｍ、内径は東西55.0ｍ、南北52.8ｍである。

横穴式石室の羨道のすぐ横の楠が成長したために石室の天井石が動いて墳丘の土が石室内に流入したり、石室の壁がひずんだり、石が割れたりと、石室が崩壊する可能性があるため、及び西都原古墳群で唯一古墳の中に入ることができるので、整備を行うために今回調査することになった。

第3節　墳丘と石室の調査

平成7年7月10日～8年2月4日に行われた調査では宮崎大学の墳丘測量の基準杭に従って2ｍ幅のトレンチを東西南北に設定し、試掘調査を行った。東トレンチは墳丘の構築状態を土層確認するために深さ約2ｍで階段状に掘り下げ、外堤はアカホヤ層まで掘り下げた。北・西・南トレンチは墳丘面、周堀底、外堤面を確認するに留めた（第3図）。

1　墳丘

墳丘の上には葺石は葺かれておらず、埴輪も樹立していなかった。墳丘の規模は東西径36.4ｍ、南北径33.6ｍ、高さ7.3ｍの規模で、東西に長い楕円形を呈している。墳丘の第１段目のテラスの高さ、外堤の高さ、205号墳の墳丘の高さはほぼ同じである。墳丘はアカホヤ層上の黒色土層の上に、アカホヤブロック混じりの層と黒色土層を互層にして積み上げている。横穴式石室がある第一段の築成は版築を行って非常に固いが、第二段の築成は第一段と異なって非常にラフである。

2　周堀

周堀（内堀）は幅9.9ｍ～11.0ｍ、深さ0.65～0.85ｍの規模である。なお外堤の外側には幅５ｍ、深さ0.65ｍの周堀（外堀）が巡ることが確認された。周堀は北・東トレンチでは二段掘りになっていたが、西・南トレンチでは見られなかった。アカホヤ層をぶち抜いている。

3　外堤

外堤は東西と南側の３ケ所は人が長年通路にした結果、一段窪んでいる。外堤は下底幅9.9ｍ～11.0ｍ、上幅5.8ｍ前後、高さ5.2ｍ前後の規模で、断面台形である。外堤も葺石を施していない。土層はアカホヤ層上の黒色土層の上に、アカホヤブロック混じりの層と黒色土層を互層にして積み上げている。墳丘と同様に中位から下半部は版築を行って非常に固いが、上半部の築成は下半部と異なって非常にラフである。

外堤の東部分で外堤の下にアカホヤ層をぶち抜いて幅１ｍ、深さ0.6ｍの溝を掘り、河原石を両側に立て、蓋石を載せる暗渠を埋設していた。この暗渠は内堀と外堀を繋いでいる。

4　横穴式石室

本墳の埋葬施設は主軸をＮ－１度－Ｅにとり、南に開口する単室構造・両袖式の横穴式石室である。石室の石材は砂岩塊石を、壁石間の詰石に河原石を使用している。楠の根の成長によって羨道先端の側壁壁体のひずみが著しい。なお石室壁面には赤色顔料は塗布されておらず、装飾文様もない。

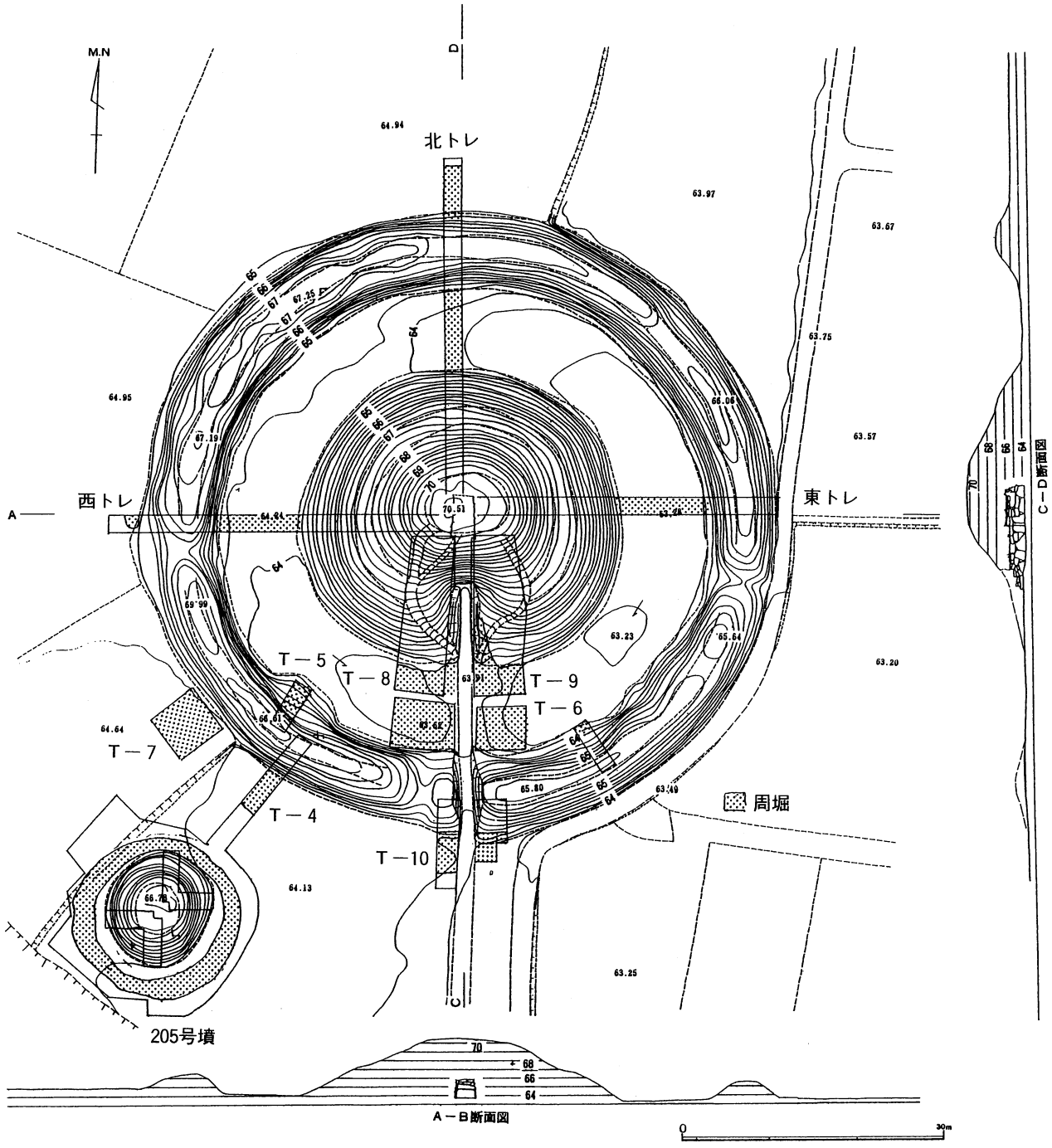
両袖の横穴式石室の規模は、玄室の内法は長さ4.8ｍ、幅1.75～2.45ｍ、高さ2.15ｍ、羨道は長さ7.5ｍ、幅1.8ｍ、高さ1.8ｍである。

玄室

奥幅1.75ｍ、前幅2.45ｍ、右壁長4.87ｍ、左壁長4.91ｍ、高さ2.07～2.15ｍを計る。左右壁線はほぼ直線に近い。前壁はほぼ左右対称であるが、後壁は右壁が前方に突出している。

壁体の構成法は各壁面に類似した手法を用いる。奥石１石、右壁４石、左壁３石の大石を立てて腰石としている。腰石は奥壁は横位に、右壁は奥から３石は縦位に最後の１石は横位に、左壁は奥から２石は横位に、最後の１石は縦位に立てている。左右側壁の腰石から内傾し、上位の石も腰石から直線的に内傾させている。奥壁は腰石を垂直に立ててその上の３石を強く内傾させている。奥壁と両側壁が接合する隅角は、壁体を互いに突き合わせて明瞭な隅角を形成している。天井石は３石である。

玄門部は素型の両袖を配するだけで特別な造作はない。左右とも袖石は垂直に立て、左右袖幅は各36㎝、袖石間の幅は1.77ｍを計る。床面には玄室と羨道とを区別する仕切り石はない。



※　宮崎大学実測図に加筆

第３図　鬼の窟古墳トレンチ配置図

石室の床面には全面河原石が敷き詰めてあり、玄室と羨道部の南北方向の中心線上に幅15㎝に両側に河原石を立てる排水溝が設置されていた。

羨道

羨道は玄室前壁の中央に接続し、幅1.8ｍで、奥端から先端までの長さは左壁7.50ｍ、右壁7.12ｍである。壁面は玄室と同様に大型の塊石を腰石として横位、縦位に立て、上に2～3段横積みしているが、玄室ほど整然していない。天井石は3石で、床面から天井までの高さは1.8ｍで、ある。先端の天井石と隣接する天井石の間に60㎝の隙間はある。

羨道部の床面には全面に河原石が敷かれており、赤色顔料が付着しているものもあった。出土した鉄釘から組合せ式の箱形木棺と推定される。

墓道

周堀から石室に続く墓道が検出され、入口の幅7.5ｍ、石室の前が幅2ｍである。

第4節　石室出土の遺物

出土状況（第4図）

玄室内の盗掘はかなり徹底的に行われていたために遺物は破片で出土しており、原位置からかなり動いていると推定される。しかし、羨道部の遺物は玄室に比較すると良好に残っていた。

石室の玄室からは棺釘・鉄鏃・馬具金具・須恵器（坏身・坏蓋・高坏・𤭯・提瓶・壺・甕など）・土師器などが、羨道部からは棺釘・耳環・鉄鏃・馬具金具・須恵器（坏身・坏蓋・甕・壺など）・土師器などが出土した。平安時代の土師器の高台付埦や寛永通宝も出土している。

墓道からは須恵器（坏・甕・壺など）、墳丘からは須恵器（坏・甕など）、周堀（内堀）からは須恵器（坏・甕など）・土師器（甕）、外堀からは須恵器（坏・甕）などが出土した。

遺物

装身具

耳環（第5図1）

1は外径2.4㎝×2.3㎝、内径1.3㎝×1.3㎝のほぼ円形を呈し、断面形は0.6×0.5㎝の楕円である。銅錆が出ているが、一部に金箔が残存している。W―7出土。

平玉（第5図2）

2は径0.5㎝、厚さ0.3㎝の平玉である。E―6出土。

武器

刀子（第5図3）

3は切っ先、身部の途中、茎部の端を欠如しており、刃部幅1.0㎝、棟厚0.3㎝、茎部幅0.8㎝、棟厚0.3㎝である。柄部に木質部も残存している。

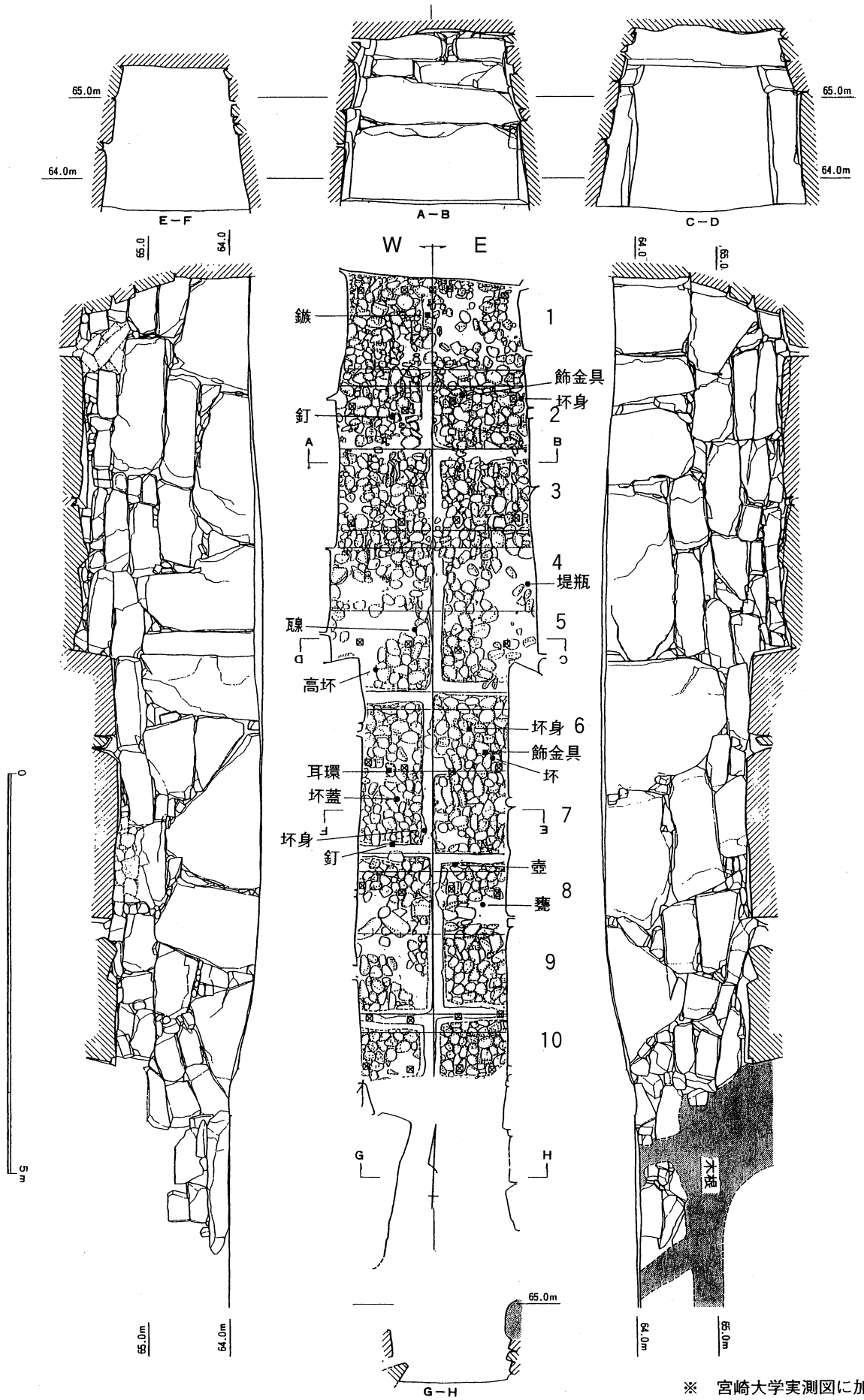
鉄鏃（第5図4～7）

4・5は平頭鏃で、4が幅2.0㎝である。6・7は鏃身である。

馬具

飾金具（第5図8～15）

爪形（8～14）、方形（15）があり、いずれも鉄地金銅張である。爪形は法量・鋲数で3鋲のタイプ



※　宮崎大学実測図に加筆

第４図　鬼の窟古墳横穴式石室遺物分布図

（8）、小型3鋲のタイプ（9・10）、2鋲のタイプ（12・13）に分かれる。

8は長さ6.0㎝、幅3.5㎝、厚さ0.2㎝の金具に3個の円頭鋲を付けたものである。9・10は8を一回り小型で長さ3.5㎝、幅2.1㎝、厚さ0.2㎝である。12は長さ3.0㎝、幅2.4㎝、厚さ0.2㎝の金具に2個の円頭鋲を付けたものである。16は長さ2.8㎝、幅2.1㎝、厚さ0.2㎝の金具に4個の円頭鋲を付けたものである。

不明金銅製品（第5図18）

18は長径9.2㎝×短径5.4㎝の楕円形の中央部に、0.2㎝の段を持つ長径3.9㎝×短径2.6㎝の楕円形を打ち出している。その中央部に長径1.8㎝×短径0.9㎝の心葉形の穴がある。一番外側に円頭鋲を付ける径0.35㎝の穴が1ヶ所ある。

鉄釘（第5図23～33）

23は円形の頭部で長さが11.5㎝で、身部の断面が一辺0.6㎝の方形である。29は径1.7㎝の円形頭部である。

須恵器

坏蓋（第6図1・3～9）

B類（1・3～9）は、口径11.1～12.1㎝、器高3.3～3.8㎝である。天井部は平坦で、天井部と体部の境は甘く、緩やかに屈曲する。口縁端部は丸く、段を有しない。天井部にヘラ削りを施すもの（3・5・9）と、施さないもの（1・8）がある。天井部内面には仕上げナデを、他の部位はヨコナデを施す。

羨道部から出土した蓋1は口径11.8㎝、器高3.3㎝で、天井部は扁平な丸みを持ち、やや外傾する体部に続く。口縁部はほぼ直立的に下方に伸び、端部は丸く仕上げている。天井部はヘラ削りを施し、＊のヘラ記号を有する。

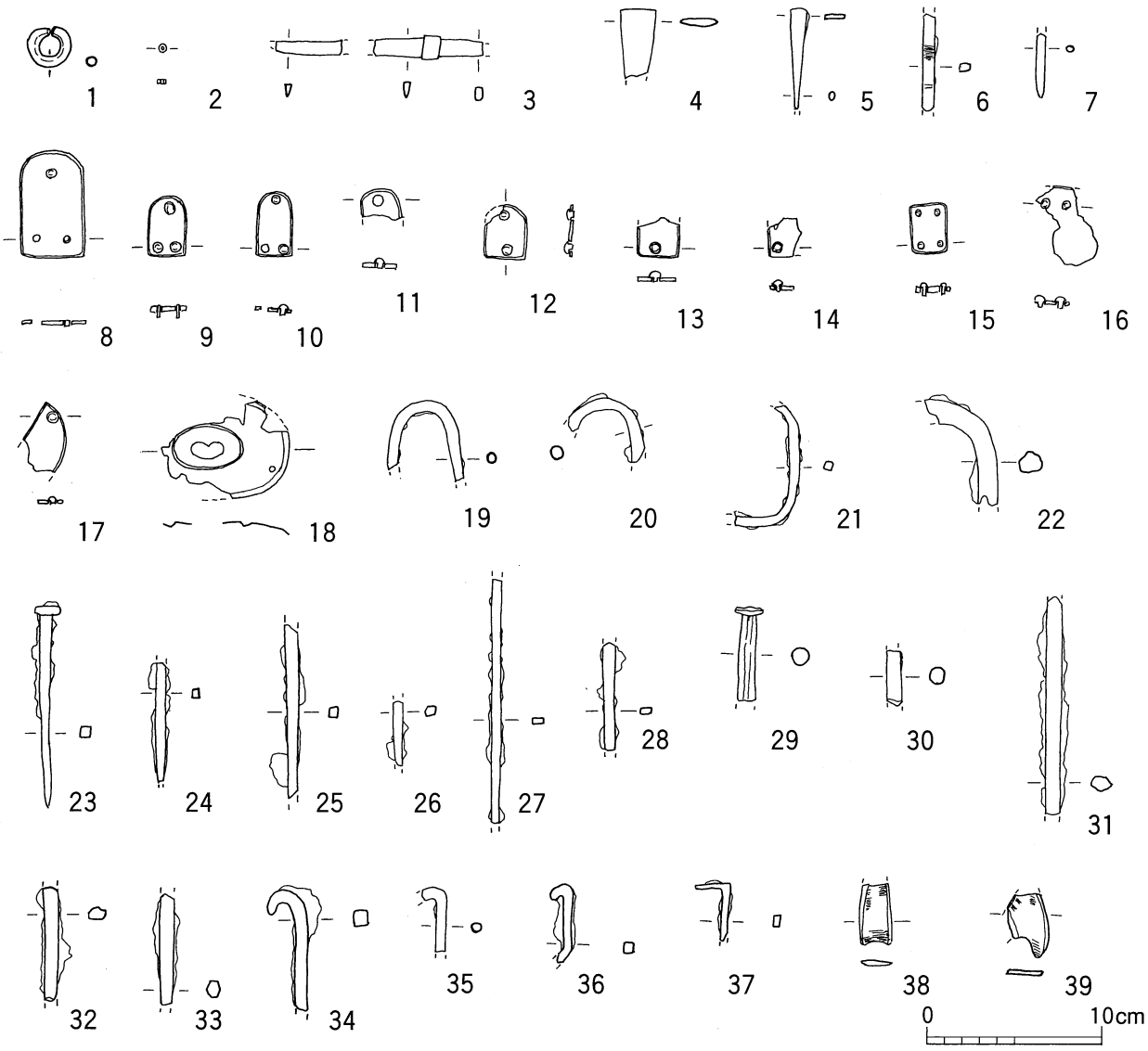
坏身（第6図2・10～18）

B類（2・10～19）は、受部径12.2～13.4㎝、口径9.9～11.3㎝、立ち上がり高0.3～0.7㎝、器高3.3～4.1㎝である。立ち上がりが短く斜め上方に伸び、端部は丸く仕上げているもの（4・17・19）と、途中から直に立ち上がるもの（8・12・13・16・21）がある。17のように立ち上がりが非常に短いものもある。受部は水平に伸び、受部と立ち上がりの間に沈線が入るもの（11・14）がある。4は一のヘラ記号を有する。天井部にはヘラ削りを、体部にはヨコナデを、天井部内面には仕上げナデを施している。

羨道部から出土した坏身2は受け部径12.8㎝、口径10.6㎝、立ち上がり高0.6㎝、器高3.7㎝で、立ち上がりが短く斜め上方に伸び、途中で垂直に伸びる。端部は丸く仕上げている。体部から底部は扁平な丸みを帯びている。底部はヘラ削りを施し、＝のヘラ記号を有する。

高坏蓋・長頸壺蓋（第6図20・21）

天井部と体部の境はやや甘く、天井部はやや平坦である。小さく内傾するかえりを有し、端部には丸味を有する。撮みは天井部が凹で横長である。天井部にはヘラ削りを、撮み周辺は撮みを付ける際のナデを、体部にはヨコナデを、天井部内面には仕上げナデを施している。20は受部径は8.7㎝、口径は10.9㎝、立ち上がり高0.6㎝、器高は2.9㎝であるのに対して、21は受部径は9.8㎝、口径は11.7㎝、立ち上がり高0.7㎝と一回り大きい。21は撮みを欠如している。



第５図　鬼の窟古墳出土遺物実測図

高坏（第６図22～25）

22の坏部は直に口縁部が立ち上がり、底部に１条の突帯を巡らす。底部外面はヘラ削りを、他の部位はヘラ削りを施す。口径は11.9㎝である。25は脚部中央に１条の凹線を施し、凹線を切って上段の長方形透かし孔を、その下位に下段の長方形透かし孔を施している。下段の透かし孔の下端は凹線を切っている。裾部は大きく開き、脚端部は丸く仕上げている。内外面ともナデを施す。裾部径は10.2㎝である。

壺（第６図26～28）

26は口頸部は基部が細く、ラッパ状に大きく外反し、端部付近で段をなして更に外反する。口縁部面及び頸部外面に羽状の沈線文を、他の部位はナデを施す。口縁端部は丸く仕上げる。26が口径13.3㎝であるが、同タイプである27は口径は14.5㎝で、一回り大きい。28の体部は肩部に張りが見られ、この部分で最大径が求められる。肩部と体部の境に１条の凹線を施している。体部の下位に斜方向の櫛描列点文を、他の部位はナデを施している。

直口壺（第７図37）

37は口縁部が短く外反し、端部は下に張り出す。胴部最大径は上位にあり、肩部に１条の凹線を巡らし、その下位に櫛描き列点文を施す。底部付近はヘラ削りを、その他の部位はナデを施している。口径は24.8㎝、胴部径は21.0㎝、器高は18.7㎝である。

脚付短頸壺（第６図29）

29は口縁部が短く外反し、端部は下に張り出す。胴部最大径は上位にあり、肩部に１条の凹線を巡らし、その下位に櫛描き列点文を施す。脚部は短く斜方向に直線的に伸び、端部は平坦である。脚部には径1.1㎝の円形透かしを四方に有する。底部付近はヘラ削りを、その他の部位はナデを施している。口径は11.4㎝、頸部径は9.9㎝、胴部最大径は21.0㎝、器高は18.7㎝、脚部径12.0㎝である。

脚付長頸壺（第６図30・31）

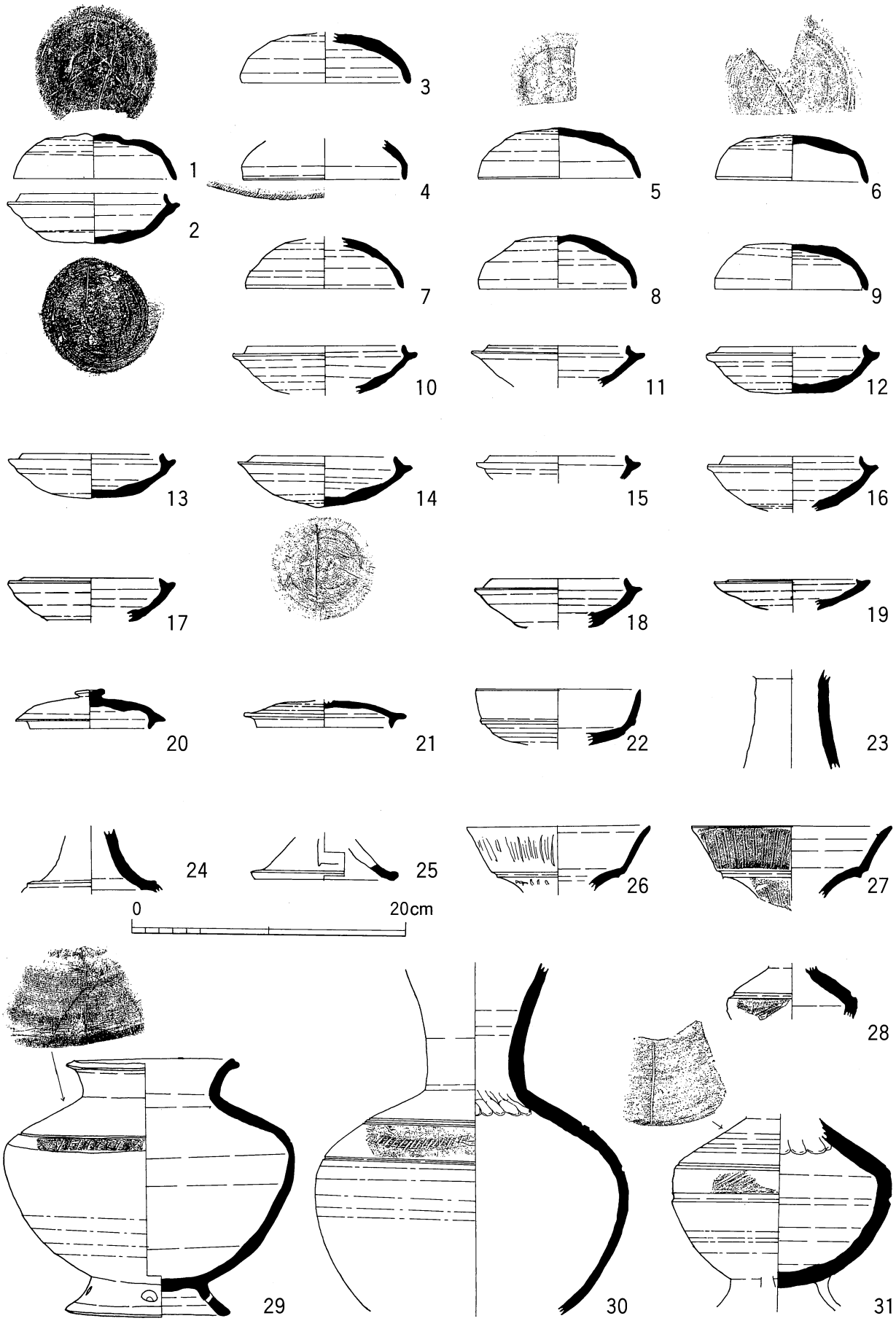
30は頸部が長く伸び、口縁端部を欠如している。胴部最大径は上位にあり、肩部の２条の凹線と１条の凹線の間に斜方向の櫛描き列点文を施す。底部と脚部も欠如している。底部付近はヘラ削りを、その他の部位はナデを施している。頸部と胴部の接合部の内面には指押さえ痕が残っている。頸部径は7.4㎝、胴部最大径は22.8㎝、器高は25.5㎝＋αである。31は口頸部と脚端部を欠如している。胴部最大径は上位にあり、肩部に斜方向の櫛描き列点文の上下に１条の凹線を施す。底部と脚部も欠如している。脚部は短く斜方向に直線的に伸び、脚部には幅0.8㎝の長方形透かしを三方に有する。底部付近はヘラ削りを、その他の部位はナデを施している。頸部と胴部の接合部の内面には指押さえ痕が残っている。頸部径は5.2㎝、胴部最大径は15.7㎝である。

提瓶（第７図32）

32は体部の前面でカキ目を施している。

甕（第７図33～36）

37と33は端部が丸く肥厚して外方へ突出するタイプである。37は頸部が直に立ち上がり、口縁部が短く外反する。胴部最大径は上位にあり、底部は丸底である。胴部外面は平行叩きを、内面には同心円叩きを施している。口径は25.0㎝、頸部径は21.7㎝、胴部最大径46.0㎝、器高45.5㎝である。35は端部が平坦であるタイプで、外面に２条の凹線を施している。内外面ともナデを施している。



第6図　鬼の窟古墳出土土器実測図（Ⅰ）

土師器

手捏ね土器　壺（第8図42）

42は径4.2㎝の球形状の胴部で、底部に焼成前穿孔がある。口縁部を欠如しており、内外面とも粗いナデを施している。

壺（第8図39）

39は短い頸部が直立気味に立ち上がり、口縁部で大きく外反し、端部は丸く仕上げている。胴部は球形状を呈し、胴部最大径は上位にある。底部は平底気味であるが丸底である。口縁部内面は工具による縦方向のナデを、口縁部内面はヨオナデを、胴部の内外面は斜方向の工具による粗いナデを、底部外面はナデを施している。胴部内面は粗いナデのために粘土紐の繋ぎ目が明瞭に残っている。口径は16.3㎝、頸部径は13.7㎝、胴部最大径29.1㎝、器高28.5㎝である。

甕（第8図38・40・41）

40は短い頸部が直立気味に立ち上がり、口縁部で大きく外反し、端部は丸く仕上げている。胴部は長胴で、胴部最大径は上位にある。底部は平底である。口縁部内外面はナデを、胴部・底部の外面はヘラによるナデを施している。ナデの方向は胴部の上位は横方向、下位は斜方向である。口径は16.9㎝、頸部径は16.6㎝、胴部最大径22.4㎝、器高26.2㎝である。 41は短い口縁部で大きく外反し、端部は丸く仕上げている。胴部の張りはあまりなく、胴部最大径は中位にある。底部は欠如している。口縁部内外面はナデを、胴部の内外面はヘラによるナデを施している。ナデの方向は胴部外面は縦方向、内面は横・斜方向である。口径は17.9㎝、頸部径は15.6㎝、胴部最大径18.5㎝、器高14.2㎝＋αである。 38は口縁部が直立気味に斜目上方に伸び、端部は丸く仕上げている。胴部最大径は上位にあり、胴部下半部と底部を欠如する。胴部外面は斜・縦方向の叩きを、他の部位はナデを施している。口径は16.9㎝、頸部径は14.5㎝、胴部最大径20.6㎝、器高13.2㎝＋αである。

土師器

坏（第8図43～49・53）

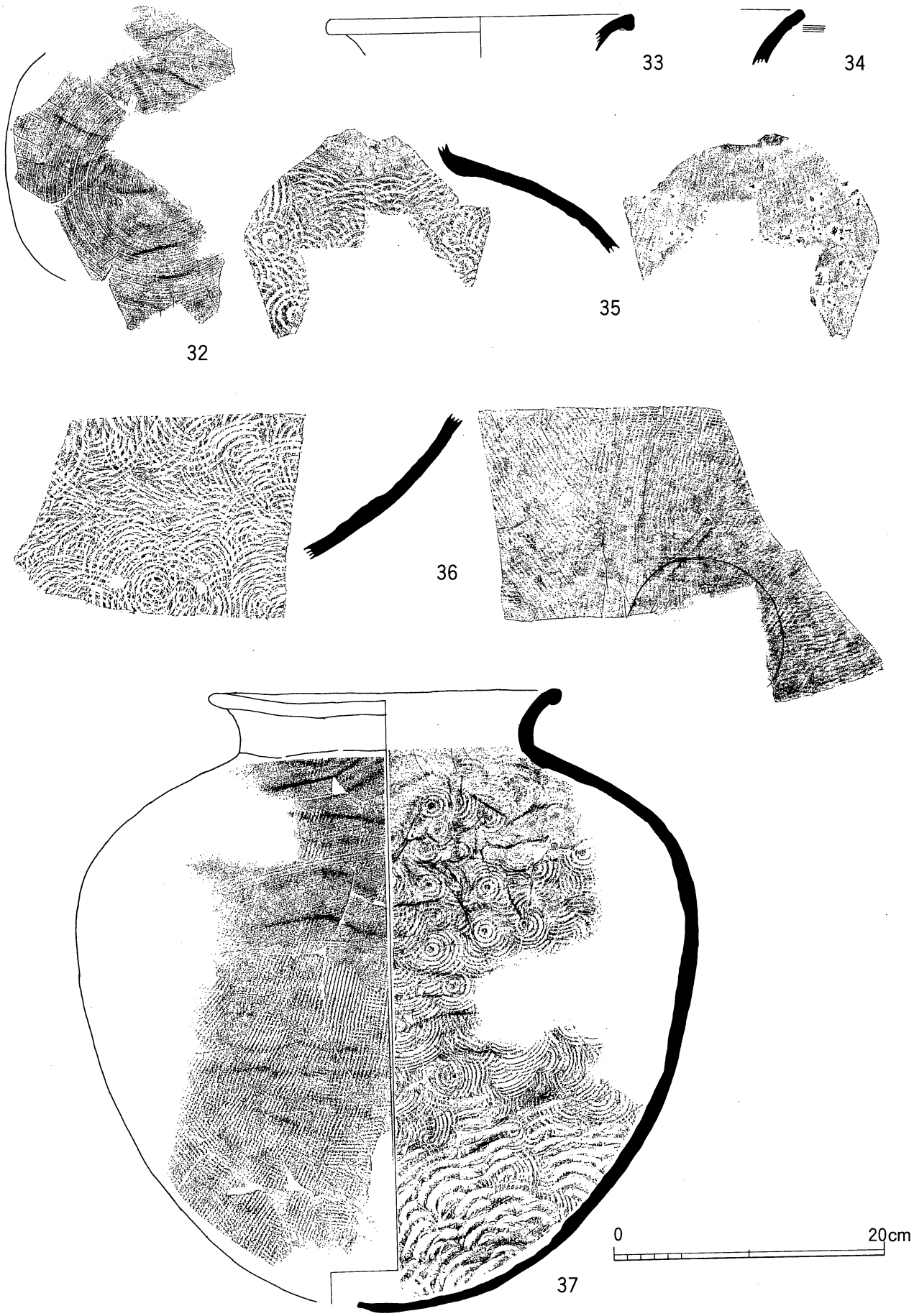
ヘラ切り底の坏は、平底に直線的に開く体部がつくタイプで、法量では43のように口径14.6㎝、底径7.7㎝、器高4.8㎝のⅠ－A－1類、44のように口径13.6㎝、底径6.6㎝、器高3.9㎝のⅠ－A－2類、45・46・47・48・49のように口径12.4～13.0㎝、底径6.5～7.5㎝、器高4.4～4.6㎝のⅠ－A－3類に分かれる。糸切り底のⅡ類は53のみである。

43は口縁部あたりで少し外反している。体部下半部はヘラ削り後、ナデを、他の部位はナデを施している。底部はヘラ切りのままである。44は口径が大きい割には器高の低いタイプで、全面ナデを施している。 48は底部はヘラ切り後、ナデを、他の部位はヨコナゲを施している。45は口縁部あたりで少し外反し、墨状の物が付着している。底部はヘラ削りを、他の部位はナデを施している。

53は糸切りの平底に内湾する体部がつくタイプで、口径12.8㎝、底径7.1㎝、器高3.9㎝である。内外面ともナデを施している。

高台付埦（第8図51・52）

51は高台がはずれ、口縁部を欠如しているが、底径8.8㎝で、体部外面は下半部はヘラミガキと工具によるヨコナデを、内面はヘラ磨きを施している。52は高台の付く底部で、口縁部～体部を欠如している。高台は短く広がるタイプで、端部は丸い。底径6.7㎝で、底部内外面ともヨコナデを施している。



第７図　鬼の窟古墳出土土器実測図（Ⅱ）

皿（第８図50）

50は底部び板状圧痕のある皿で、平底に直線的に開く体部がつくタイプで、口径10.2㎝、底径6.7㎝、器高2.4㎝である。ヨコナデとナデを全面に施している。

瓦（第８図55）

55は凹面には叩き板による粗いナデを、凸面はナデを施した平瓦片である。

第５節　小結

今回の調査の成果で注目されるのは次の点である。古墳の構造という面では墳丘がアカホヤ層上の黒色土層の上に、アカホヤブロック混じりの層と黒色土層を互層にして積み上げている点、横穴式石室がある第一段の築成は版築を行って非常に固いが、第二段の築成は第一段と異なって非常にラフである点である。また外堤の外側には幅５ｍ、深さ0.65ｍの周堀（外堀）が確認され、二重の周堀を有する点である。横穴式石室の面では県内では13基だけで、１古墳群に１基採用されており、近くでは千畑古墳（ちばたけ・西都市大字穂北字桜田・墳長40ｍの前方後円墳・６世紀後半）がある。石室の床面には全面に河原石が敷き詰めてあり、玄室と羨道部の南北方向の中心線上に幅15㎝に両側に河原石を立てる排水溝が設置されていた点である。また鉄釘の出土から予想されていたように組合せ式の箱形木棺であった点である。出土遺物の面では玄室からは棺釘・鉄鏃・金銅装馬具金具・須恵器（坏・甕・提瓶など）・土師器などが、羨道部からは棺釘・耳環・鉄鏃・金銅装馬具金具・須恵器（坏・壺など）・土師器などが出土したことからかなりの副葬品があったと推定される。古墳造営時期についてはＴＫ43型式の時期の六世紀後半、ＴＫ209型式の時期の６世紀末～７世紀初め、隼上りⅢ段階の７世紀の第１・２四半期の交わり頃[(4)]などがあるが、今回の調査で出土した須恵器はＴＫ43型式ではなくＴＫ209型式であった。このことは当古墳の時期を考える上で重要であるがＴＫ43型式の時期を否定するものではない。また平安時代に再利用されたことである。

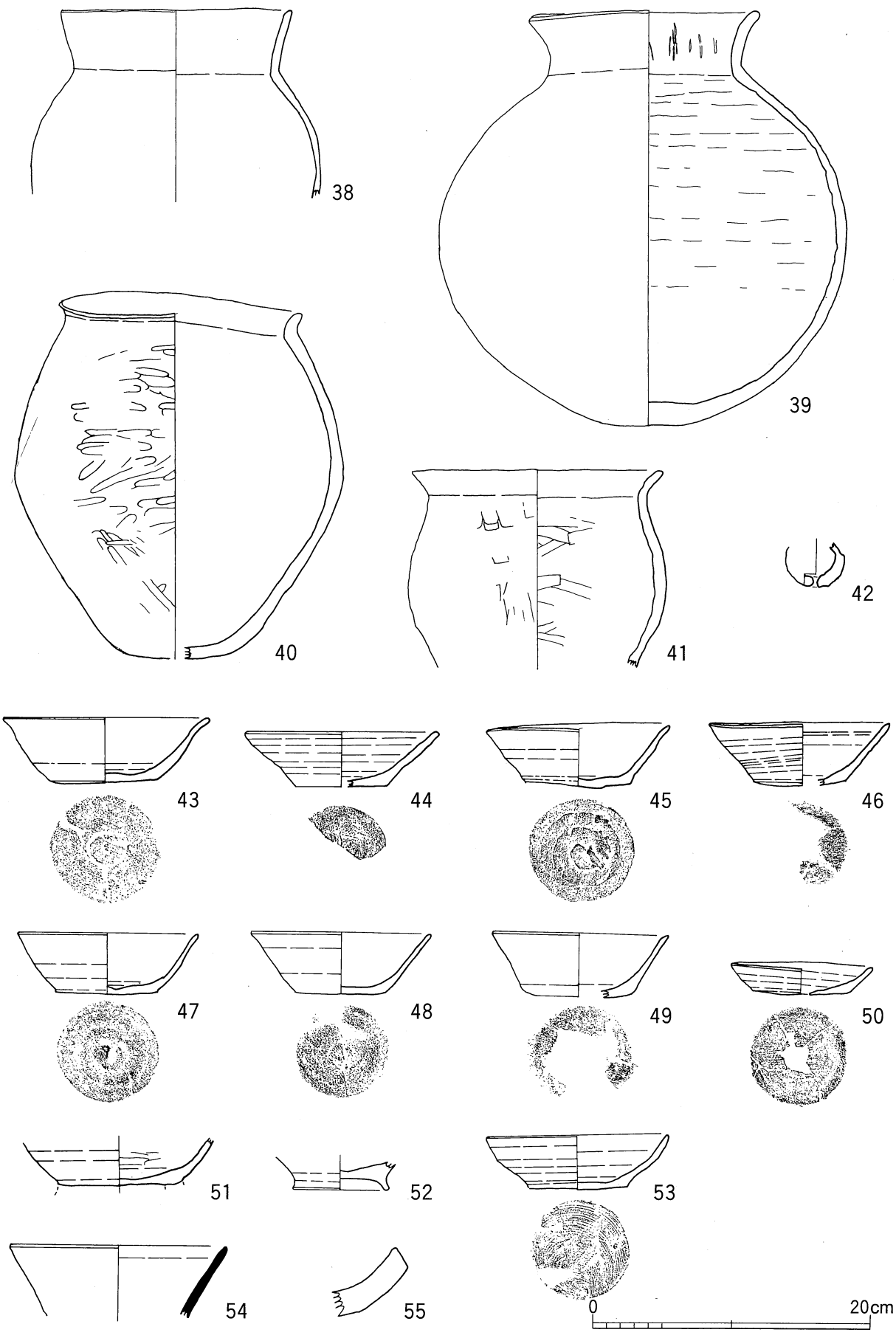
(註)

(1) 福尾正彦「宮崎県内の須恵器－地下式横穴・高塚古墳出土例を中心として－」『古文化談叢』第６集　昭和54年（1979）

(2) 日高正晴「鬼の窟古墳についての考察」『西都原古墳研究所年報』第６号　平成２年(1990)

(3) 柳沢一男「宮崎県の古墳資料（１）」『宮崎考古』第13号　平成６年（1994）

(4) 註３文献に同じ



第8図　鬼の窟古墳出土土器実測図（Ⅲ）

鬼の窟古墳出土土器観察表(1)

図面番号	遺物番号	出土地点 出土遺構	種別	器種 部位	法量(cm)				器面調整・手法ほか		色調		胎土	焼成	備考
					口径	器高	受部径	底径	外面	内面	外面	内面			
第6図	1	羨道部 W−7	須恵器	坏蓋	11.8	3.3			ヨコナデ・ヘラ削り	ヨコナデ・仕上げナデ	暗灰 (N 3/)	灰 (5Y 5/1)	3㎜以下の灰白・褐灰粒を含む	堅緻	ヘラ記号(米)
第6図	2	羨道部 E−6	須恵器	坏身	10.6	3.7	12.8		ヨコナデ・ヘラ削り	ヨコナデ	灰 (5Y 5/1)	明褐灰 (7.5YR 7/1)	2㎜以下の乳白色・灰白粒を少し含む	堅緻	ヘラ記号(=) 赤色顔料(外面)
第6図	3	21トレンチ	須恵器	坏蓋	12.0	3.6			ヨコナデ・ヘラ削り	ヨコナデ	灰 (10Y 6/1)	灰 (10Y 6/1)	1㎜以下の白色粒を含む	堅緻	
第6図	4	玄室 E−4	須恵器	坏蓋	11.7	2.8 +α			ヨコナデ	ヨコナデ	灰 (N 4/)	灰 (N 4/)	1.5㎜以下の灰・黒・乳白色粒を含む	堅緻	自然釉(外面) 口縁部に工具による刻み
第6図	5	墳丘	須恵器	坏蓋	11.7	3.7			ヨコナデ・ヘラ削り	ヨコナデ・仕上げナデ	灰 (10Y 4/1)	灰 (10Y 4/1)	精良	堅緻	ヘラ記号(=)
第6図	6	外堀	須恵器	坏蓋	11.0	3.2			ヨコナデ・ヘラ削り	ヨコナデ・仕上げナデ	灰 (10Y 4/1)	灰 (10Y 4/1)	1.5㎜以下の白色粒を含む	堅緻	ヘラ記号(—)
第6図	7	玄室	須恵器	坏蓋	11.3	3.6			ヨコナデ・ヘラ削り	ヨコナデ	灰 (5Y 5/)	灰 (5Y 5/)	精良	堅緻	
第6図	8	玄室 E−2	須恵器	坏蓋	11.2	3.8			ヨコナデ・ヘラ削り	ヨコナデ・仕上げナデ	灰 (N 5/)	灰白 (7.5Y 7/1)	精良	堅緻	
第6図	9	玄室 W−4	須恵器	坏蓋	11.0	3.3			ヨコナデ・ヘラ削り	ヨコナデ・仕上げナデ	灰 (N 4/)	灰 (5Y 5/1)	精良	堅緻	自然釉(外面) 赤色顔料(内面)
第6図	10	玄室 E−2	須恵器	坏身	11.9	3.5	13.4		ヨコナデ・ヘラ削り	ヨコナデ・仕上げナデ	にぶい赤褐 (5YR 5/3)	黒褐 (2.5Y 3/1)	3㎜以下の灰・黄灰色粒を少し含む	やや軟	自然釉(外面)
第6図	11	玄室 E−1	須恵器	坏身	10.5	2.9	12.6		ヨコナデ	ヨコナデ	灰 (10Y 6/1)	灰 (N 5)	2㎜以下の白色粒を含む	堅緻	自然釉(外面)
第6図	12	玄室 W−3	須恵器	坏身	10.5	3.4	12.6		ヨコナデ・ヘラ削り	ヨコナデ・仕上げナデ	オリーブ灰 (2.5GY 5/1)	オリーブ灰 (2.5GY 5/1)	1㎜以下の黒・乳白色粒を含む	堅緻	
第6図	13	羨道部 E−8	須恵器	坏身	10.2	3.2	12.2		ヨコナデ・ヘラ削り	ヨコナデ・仕上げナデ	灰 (N 4/0)	灰 (N 4/0)	1〜2㎜の灰白粒を含む	堅緻	
第6図	14	羨道部 W−7	須恵器	坏身	10.3	3.7	12.6		ヨコナデ・ヘラ削り	ヨコナデ・仕上げナデ	灰 (N 5/)	灰 (N 5/)	3㎜の黄灰粒を含む	堅緻	自然釉(外面) 赤色顔料(外面) ヘラ記号(—)
第6図	15	玄室 E−2	須恵器	坏身	10.0	1.7 +α	12.0		ヨコナデ・ヘラ削り	ヨコナデ	灰 (7.5Y 6/1)	灰 (7.5Y 5/1)	精良	堅緻	
第6図	16	玄室 W−4	須恵器	坏身	10.0	4.0	12.4		ヨコナデ・ヘラ削り	ヨコナデ・仕上げナデ	灰 (N 4)	灰 (N 4)	1㎜以下の白色粒を含む	堅緻	自然釉(外面)
第6図	17	羨道部 W−8	須恵器	坏身	9.9	3.1	12.2		ヨコナデ・ヘラ削り	ヨコナデ	灰 (7.5Y 6/1)	黄灰 (2.5Y 6/1)	2㎜以下の白色粒を含む	堅緻	自然釉(外面)
第6図	18	内堀	須恵器	坏身	9.8	3.5	12.2		ヨコナデ	ヨコナデ	灰 (7.5Y 5/1)	灰 (N 5)	0.5㎜以下の褐色粒を含む	堅緻	自然釉(外面)
第6図	19	内堀	須恵器	坏身	9.4	2.2 +α	11.4		ヨコナデ・ヘラ削り	ヨコナデ	灰 (7.5Y 5/1)	灰 (7.5Y 5/1)	1㎜以下の白色・茶色粒を含む	堅緻	

鬼の窟古墳出土土器観察表(2)

図面番号	遺物番号	出土地点 出土遺構	種別	器種 部位	法量(cm)				器面調整・手法ほか		色調		胎土	焼成	備考
					口径	器高	受部径	底径	外面	内面	外面	内面			
第6図	20	内堀	須恵器	蓋	8.7	2.8	10.9		ヨコナデ	ヨコナデ・仕上げナデ	灰 (5Y 5/1)	灰 (5Y 5/1)	1㎜以下の黒・灰・淡黄・乳白色粒を含む	堅緻	
第6図	21	墳丘	須恵器	蓋	9.8	2.0 +α	11.8		ヨコナデ・ヘラ削り	ヨコナデ	灰 (5Y 5/1)	灰 (5Y 5/1)	5㎜大の灰色粒を少し含む	堅緻	櫛描列点文(天井部) 摘み欠如
第6図	22	玄室 E−2	須恵器	高坏 坏部	11.9	4.0 +α			ヨコナデ・ヘラ削り	ヨコナデ	灰 (N 6)	灰 (N 6)	2㎜以下の乳白色粒を含む	堅緻	自然釉(外面)
第6図	23	玄室 E−1	須恵器	高坏 脚部		7.0 +α			ヨコナデ	ヨコナデ	灰 (7.5Y 4/1)	灰 (7.5Y 4/1)	精良	堅緻	
第6図	24	墳丘	須恵器	高坏 脚部		4.8 +α			ヨコナデ	ヨコナデ	灰 (7.5Y 4/1)	灰 (7.5Y 4/1)	精良	堅緻	
第6図	25	墓道	須恵器	高坏 脚部		3.0 +α			ヨコナデ	ヨコナデ	灰 (10Y 5/1)	灰 (10Y 5/1)	精良	堅緻	長方形透し
第6図	26	羨道部 W−8	須恵器	甕 口縁部		4.8 +α			ヨコナデ	ヨコナデ	灰 (7.5Y 6/1)	灰 (N 6)	1㎜以下の白色粒を含む	堅緻	自然釉(外面)
第6図	27	玄室 W−4	須恵器	甕 口縁部		5.3 +α			縦方向のハケ目	ヨコナデ	灰 (5Y 5/1)	灰 (5Y 5/1)	1㎜以下の白色粒を含む	堅緻	
第6図	28	玄室 W−5	須恵器	甕 体部		3.6 +α	9.4		ヨコナデ	ヨコナデ	灰 (7.5Y 5/1)	灰 (N 5)	1㎜以下の白色粒を含む	堅緻	斜方向の櫛描列点文
第6図	29	羨道部 E−6	須恵器	脚付壺	11.4	18.7	21.1		ヨコナデ・カキ目 ヘラ削り	ヨコナデ	灰 (N 5)	灰 (N 5)	2㎜以下の白色粒を含む	堅緻	斜方向の櫛描列点文 脚部に円形透し (四方)
第6図	30	羨道部 E−7	須恵器	長甕壺		24.2 +α	22.8		ヨコナデ・ヘラ削り	ヨコナデ	灰 (10Y 4/1)	灰 (5Y 6/1)	3㎜以下の白・灰白色粒を含む	堅緻	斜方向の櫛描列点文 ヘラ記号(+)
第6図	31	玄室 E−2	須恵器	脚付壺		14.5 +α	15.7		ヨコナデ・ヘラ削り	ヨコナデ	灰 (N 5)	黄灰 (2.5Y 4/1)	3㎜以下の褐色粒を含む	堅緻	斜方向の櫛描列点文 方形透し
第7図	32	玄室 E−3	須恵器	提瓶 体部		16.7 +α			カキ目	ナデ	灰 (N 6/)	灰 (N 4)	1〜1.5㎜の半透明・黒色粒を含む	堅緻	自然釉(外面)
第7図	33	玄室 E−1	須恵器	甕 口縁部	22.6	2.7 +α			ヨコナデ	ヨコナデ	暗灰 (N 3)	灰白 (5Y 7/2)	3㎜以下の乳白色粒を含む	堅緻	自然釉(外面)
第7図	34	外堀	須恵器	甕 口縁部		4.0 +α			ヨコナデ	ヨコナデ	灰 (N 4/)	灰オリーブ (5Y 1/2)	精良	堅緻	自然釉(内面)
第7図	35	外堀	須恵器	甕 胴部					縦方向の平行叩キ	同心円叩キ	浅黄 (5Y 8/3)	黄灰 (2.5Y 4/1)	精良	堅緻	自然釉(外面)
第7図	36	外堀	須恵器	甕 底部					斜方向の平行叩キ	同心円叩キ	褐灰 (5YR 4/1)	灰黄 (2.5Y 6/2)	精良	堅緻	坏蓋を台にした痕跡
第7図	37	外堀	須恵器	壺	25.0	45.5	46.0		ヨコナデ・カキ目 平行叩キ	ヨコナデ・同心円叩キ	灰 (7.5Y 6/1)	灰 (10Y 6/1)	3〜4㎜の浅黄・黒色粒を含む	堅緻	底部に焼成後の穿孔
第8図	38	外堀	土師器	壺	16.3	13.5 +α	20.6		ヨコナデ・叩キ	ヨコナデ	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	浅黄 (2.5Y 7/3)	1〜4㎜以下の灰・褐色粒を含む	良好	

鬼の窟古墳出土土器観察表(3)

図面番号	遺物番号	出土地点 出土遺構	種別	器種 部位	法量(cm)				器面調整・手法ほか		色調		胎土	焼成	備考
					口径	器高	受部径	底径	外面	内面	外面	内面			
第8図	39	内堀	土師器	壺	16.2	29.8	29.2		ヨコナデ・工具による粗いナデ	ヨコナデ	橙 (7.5YR 7/6)	橙 (7.5YR 7/6)	3㎜以下の灰白・灰・褐色粒を多く含む	良好	スス付着(外面)
第8図	40	内堀	土師器	甕	17.0	26.4	22.4		ナデ・工具によるナデ	ヨコナデ	明黄褐 (5YR 5/6)	明黄褐 (5YR 5/6)	2㎜以下の黒・灰・黄灰色粒を含む	良好	
第8図	41	内堀	土師器	甕	18.0	14.0 +α	18.6		ナデ・工具によるナデ	ナデ・工具によるナデ	橙 (7.5YR 6/6)	橙 (7.5YR 6/6)	2㎜以下の透明・半透明・黒色粒を多く含む	良好	
第8図	42	墳丘	土師器	手捏壺		3.2 +α	4.2		ナデ	ナデ	黄橙 (10YR 8/6)	黄橙 (10YR 8/6)	1㎜以下の浅黄・黒色粒を含む	不良	底部穿孔
第8図	43	玄室	土師器	坏	14.6	4.8		7.7	ヨコナデ	ヨコナデ	橙 (7.5YR 7/6)	橙 (7.5YR 7/6)	1.5㎜以下の茶色粒多い	良好	ヘラ切り底
第8図	44	玄室 W−2	土師器	坏	13.6	4.0		6.6	ヨコナデ	ヨコナデ	橙 (2.5YR 6/6)	橙 (2.5YR 6/6)	1㎜の乳白・白色粒を含む	良好	
第8図	45	玄室 E−2	土師器	坏	13.0	4.6		7.5	ヨコナデ・削り	ヨコナデ	橙 (2.5YR 7/6)	橙 (5YR 7/6)	1㎜以下の灰・褐・赤褐色粒を含む	良好	口縁部内面に墨状の付着物。
第8図	46	玄室 E−2	土師器	坏	12.9	4.5		6.6	ヨコナデ	ヨコナデ	橙 (2.5YR 7/8)	橙 (5YR 6/6)	1㎜以下の乳白・透明粒を含む	良好	
第8図	47	玄室 E−1	土師器	坏	12.8	4.4		7.3	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	にぶい橙 (7.5YR 7/6)	1〜2㎜の灰・茶・黒色粒を含む	良好	ヘラ切り底
第8図	48	玄室	土師器	坏	12.7	4.4		6.5	ヨコナデ	ヨコナデ	明黄褐 (10YR 7/6)	明黄褐 (10YR 7/6)	2㎜以下の黒・灰・茶・褐色粒を含む	良好	ヘラ切り底
第8図	49	墓道	土師器	坏	12.4	4.5		7.3	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	1㎜の褐色粒を含む	良好	
第8図	50	玄室 E−6	土師器	小皿	10.2	2.4		6.7	ヨコナデ	ヨコナデ	橙 (7.5YR 6/6)	橙 (7.5YR 7/6)	1㎜以下の黒・灰・黄灰・乳白色粒を含む	良好	板状圧痕 焼成前穿孔(底部)
第8図	51	玄室 E−2	土師器	高台付埦		3.4 +α		8.8	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙 (5YR 7/8)	橙 (5YR 7/8)	2㎜以下の黄灰・褐色粒を含む	良好	ヘラ切り底
第8図	52	玄室	土師器	高台付埦		2.0 +α		6.7	ヨコナデ	ヨコナデ	橙 (7.5YR 6/6)	明黄褐 (10YR 7/6)	1㎜以下の黒灰色粒を少し含む	良好	ヘラ切り底
第8図	53	玄室 W−3	土師器	坏	13.0	3.9		7.1	ヨコナデ	ヨコナデ	橙 (7.5YR 7/6)	橙 (7.5YR 7/6)	精良	良好	糸切り底
第8図	54	玄室 W−2	須恵器	坏	15.4	5.3 +α			ナデ	ナデ	灰 (N 4)	灰 (N 6)	3㎜以下の白色粒を含む	堅緻	自然釉(外面)
第8図	55	玄室 E−2	瓦	平瓦					ナデ	工具による粗いナデ	黄灰 (2.5Y 6/1)	黄灰 (2.5Y 4/1)	1〜2.5㎜の黒色粒を含む	堅緻	

第Ⅲ章　西都原205号調査

第１節　位置と現況

台地の縁の標高50～60ｍに前方後円墳が並ぶグループと男狭穂塚・女狭穂塚のグループとのほぼ中間に位置する鬼の窟古墳の南西に約58ｍに位置する。標高64ｍである。

第２節　試掘調査以前の状況

205号墳（旧番号201号墳、西都市大字三宅字酒元の上5011の２）は大正元年12月26日に東京帝国大学理科大学助手柴田常恵氏の指導で発掘調査され、土器片が少量出土したのみで、既に盗掘されていた。調査時から鬼の窟古墳の陪塚と考えられていた。調査時の規模は報告によれば「高さ８尺（2.4ｍ)、幅５間（９ｍ)」であるが、現況の墳丘の規模は東西径12.9ｍ、南北径13.5ｍ、高さ2.8ｍであった。

第３節　墳丘と周溝の調査

大正元年の調査で内部主体部が検出されなかったことから地下式横穴墓の墳丘の可能性もあるので、平成７年８月の地中レーダーの調査の結果、墳丘内には空洞反応はなかったが、墳丘外の南側に反応があった。そこで墳丘の東西南北に２ｍ幅のトレンチを設定し、周堀はすべて調査した。

東トレンチは墳丘の構築状態の土層確認するために深さ約２ｍで階段状に掘り下げた。北・西・南トレンチは墳丘面を確認するにとどめた。

１　墳丘

墳丘の上には葺石は葺かれておらず、埴輪も樹立していなかった。北側部分は本来の墳丘を残していたが、東側・南側・西側は１ｍ程墳丘を削られていた。墳丘の規模は長径15.1ｍ、短径13.8ｍ、高さ2.5ｍ、周堀は幅1.7～2.3ｍ、深さ0.4～1.1ｍである。周堀を含めると長径18.3ｍ、短径18.1ｍの規模である。

墳丘はアカホヤ層上の黒色土層の上に、アカホヤブロック混じりの層と黒色土層を互層にして積み上げている。墳丘下半部の築成は版築を行って非常に固いが、上半部の築成は下半部と異なって非常にラフである。

２　周堀（第９図）

周堀は幅1.7～2.3ｍ、深さ0.4～1.1ｍで階段状に掘削している。

第４節　周溝出土の遺物

出土状況

墳丘上から須恵器の坏、周堀の西南部を中心として須恵器の坏・高坏・𤭯・脚付長頸壺、土師器の高

坏・埦などが出土した。特に周堀の西南部（a群）を中心に出土している。

須恵器

坏蓋（第10図1～16）

A類（1～4）は、口径13.8～15.2㎝、器高3.8～5.7㎝である。天井部と体部の境に凹線が入り、緩やかに屈曲する。口縁部は丸く、段を有しない。天井部はヘラ削りを、内面は仕上げナデを施す。

B類（7～14）は、口径11.1～12.4㎝、器高3.5～4.1㎝である。4は口径12.0㎝であるが、器高が4.9㎝と特に高い。天井部は平坦で、天井部と体部の境は甘く、緩やかに屈曲する。口縁部は丸く、段を有しない。天井部にヘラ削りを施すものと、施さないもの（14・10・12）がある。

C類（15・16）は、口径9.2～9.4㎝、器高2.9～3.5㎝である。天井部と体部の境はなく、丸味を持ちながら緩やかに屈曲する。口縁部は丸く、段を有しない。天井部にはヘラ削りを、内面には仕上げナデを施している。

坏身（第10図17～34）

A類　18は受部径は15.6㎝、口径は12.6㎝、立ち上がり高0.75㎝、器高は3.5㎝である。立ち上がりが短く斜め上方に伸び、途中で直に立ち上がり、端部は鋭く仕上げている。受部は水平に伸びる。体部から底部は扁平な丸味を帯びている。体部にヘラ削りを施している。

B類　受部径は12.2～13.7㎝、口径は9.8～10.9㎝、立ち上がり高0.3～0.8㎝、器高は2.8～4.1㎝である。32は受部径12.5㎝であるが、器高が4.5㎝と特に高い。立ち上がりが短く斜め上方に伸び、端部は丸く仕上げているもの（21・25・26・29～32）と、途中から直に立ち上がるもの（19・20・24・33・34）がある。27のように立ち上がりが非常に短いものもある。受部は水平に伸び、受部と立ち上がりの間に沈線が入るもの（24・27・30・31）がある。天井部にはヘラ削りを、撮み周辺は撮みを付ける際のナデを、体部にはヨコナデを、天井部内面には仕上げナデを施している。

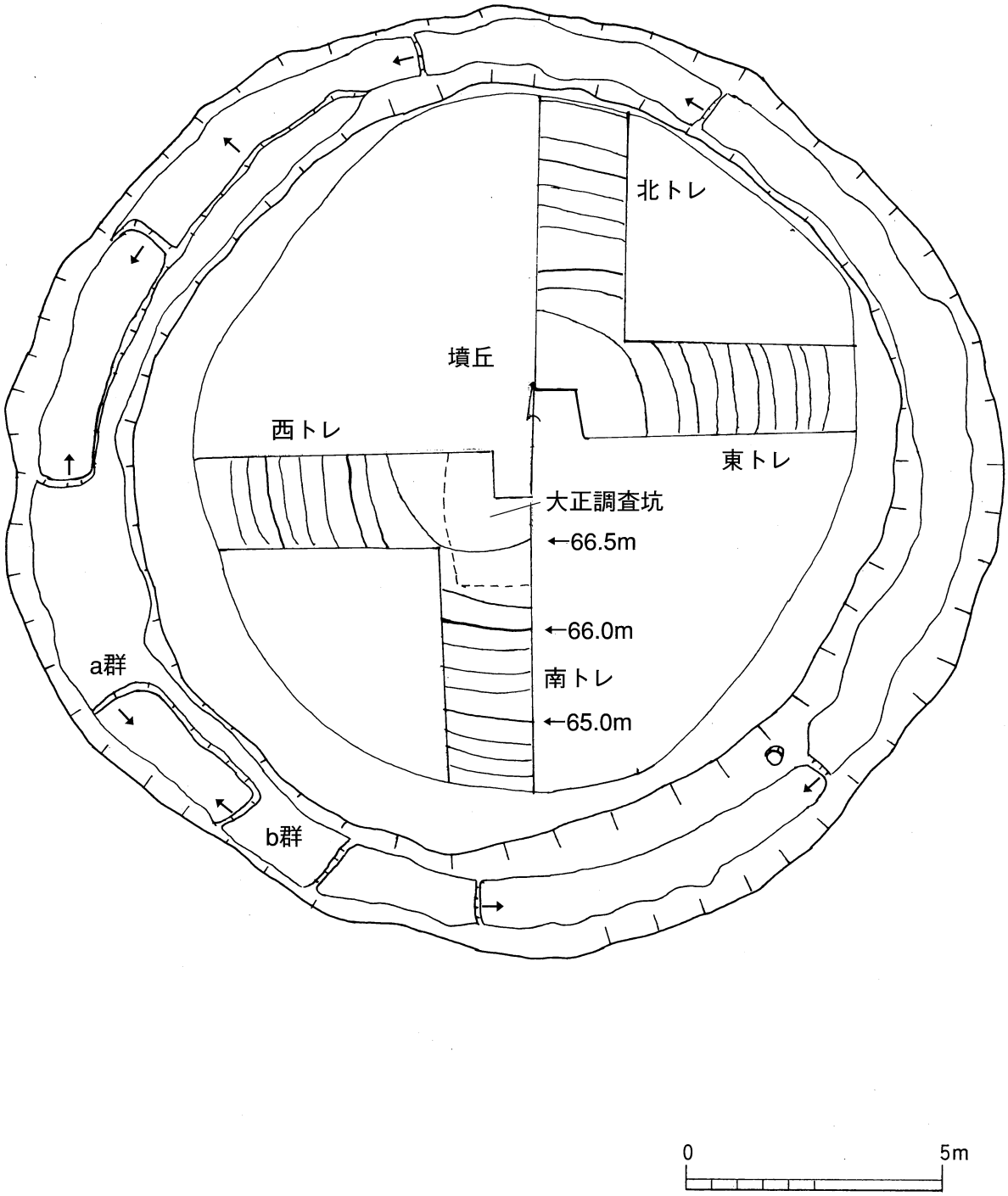
高坏蓋（第11・12図39～42・50・51・53・55）

A類　口径は15.5～16.7㎝、器高は5.2～5.7㎝のA－1類（35～37）と口径は14.0～14.7㎝、器高は4.7～5.3㎝のA－2類（38～42）に分かれる。A－1類は天井部と体部の境は凹線で明瞭に区別しており、天井部はやや平坦気味で、口縁端部は丸い。A－2類は天井部と体部の境は凹線で区別しているがやや甘く、全体的に丸く、口縁端部は丸い。撮みには平坦で横長のもの（36・38・39・40・42）と丸味をもつもの（35）、高いもの（41）がある。天井部にはヘラ削りを、撮み周辺は撮みを付ける際のナデを、体部にはヨコナデを、天井部内面には仕上げナデを施している。

B類　口径は11.9～12.4㎝、器高は4.7～5.7㎝である（50・51・53・55）。天井部と体部の境はやや甘く、天井部はやや平坦である。口縁端部には丸味を有する。撮みには平坦で横長である。天井部にはヘラ削りを、撮み周辺は撮みを付ける際のナデを、体部にはヨコナデを、天井部内面には仕上げナデを施している。

高坏（第11・12図43～49・52・54・56～61）

A類　有蓋長脚二段の長方形透かしで、脚の基部がやや太い。脚部の中央に2条の沈線を施し、上下に分け、長方形の三方透かしは沈線を切っているが、二方透かしは切っていない。脚裾部にも1条の沈線を施している。脚端部は上下につまみ出されるもの（43・47・49）と、上だけのもの（44・45・46・48）に分かれる。坏部の立ち上がりは1.0～1.2㎝とやや短く内傾し、口唇部は平坦である。三方透し



第 9 図　西都原205号墳周溝実測図

（43～48）と二方透し（49）がある。口径は12.8～14.0㎝、受部径は15.8～16.7㎝、器高は19.3～22.4㎝、脚部径15.4～17.1㎝である。坏部外面の体部はヨコナデを、底部はヘラ削りを、内面はヨコナデと仕上げナデを施している。脚部の基部外面はヨコナデを、内面は絞りを、脚裾部の内外面ともヨコナデを施している。

B類　有蓋短脚の方形透しで、方形透かしの下位から内湾する（52・54・56）。脚端部は平坦に仕上げている。坏部の立ち上がりは1.0㎝とやや短く内傾し、途中で直気味に伸び、口唇部は丸い。二方透しである。口径は9.8～10.7㎝、受部径は12.5～13.1㎝、器高は6.8～7.3㎝、脚部径8.8～9.4㎝である。坏部外面の体部はヨコナデを、底部はヘラ削りを、内面はヨコナデと仕上げナデを施している。脚部の内外面ともヨコナデを施している。

C類　無蓋長脚で、脚部の中央部の2本の沈線の上下に長方形透かしを二方に施す（57）。脚端部は上につまみ出される。坏部は斜方向に伸び、外面に2条の沈線を施し、口唇部は丸い。口径は10.8㎝、器高は13.4㎝、脚部径10.3㎝である。内外面ともヨコナデを施している。

D類　無蓋長脚で透しはなく、坏部の体部と底部の境に1条の沈線がめぐる（58）。脚端部は上下につまみ出される。坏部はほぼ直に伸び、口唇部は丸い。口径は11.0㎝、器高は10.6㎝、脚部径10.8㎝である。坏部外面の体部はヨコナデを、底部はヘラ削りを、内面はヨコナデと仕上げナデを施している。脚部の内外面ともヨコナデを施している。

E類　無蓋短脚で透しはなく、坏部はほぼ直に伸び、脚部は大きく外反する（60）。脚端部は上下に甘くつまみ出される。坏部の口唇部は丸い。60は口径は12.4㎝、器高は7.9㎝、脚部径8.8㎝と小ぶりであるのに対して、61は口径は16.7㎝と大ぶりである。坏部外面はヨコナデを、内面はヨコナデと仕上げナデを施している。脚部の内外面ともヨコナデを施している。

瓶（第12図63）

63は口頸部が大きく外反して伸び、頸部は屈曲して口縁部に続く。頸部に2条の凹線を施し、端部は丸く仕上げる。胴部は楕円形を呈し、肩部と体部の境に1条の凹線を施している。体部に直径1.7㎝の円形穿孔が1有り。底部はヘラ削りを、その他の部位はナデを施している。頸部の内面は絞りを施している。口径は12.1㎝、球形部は9.2㎝、器高は15.4㎝である。

脚付瓶（第12図62）

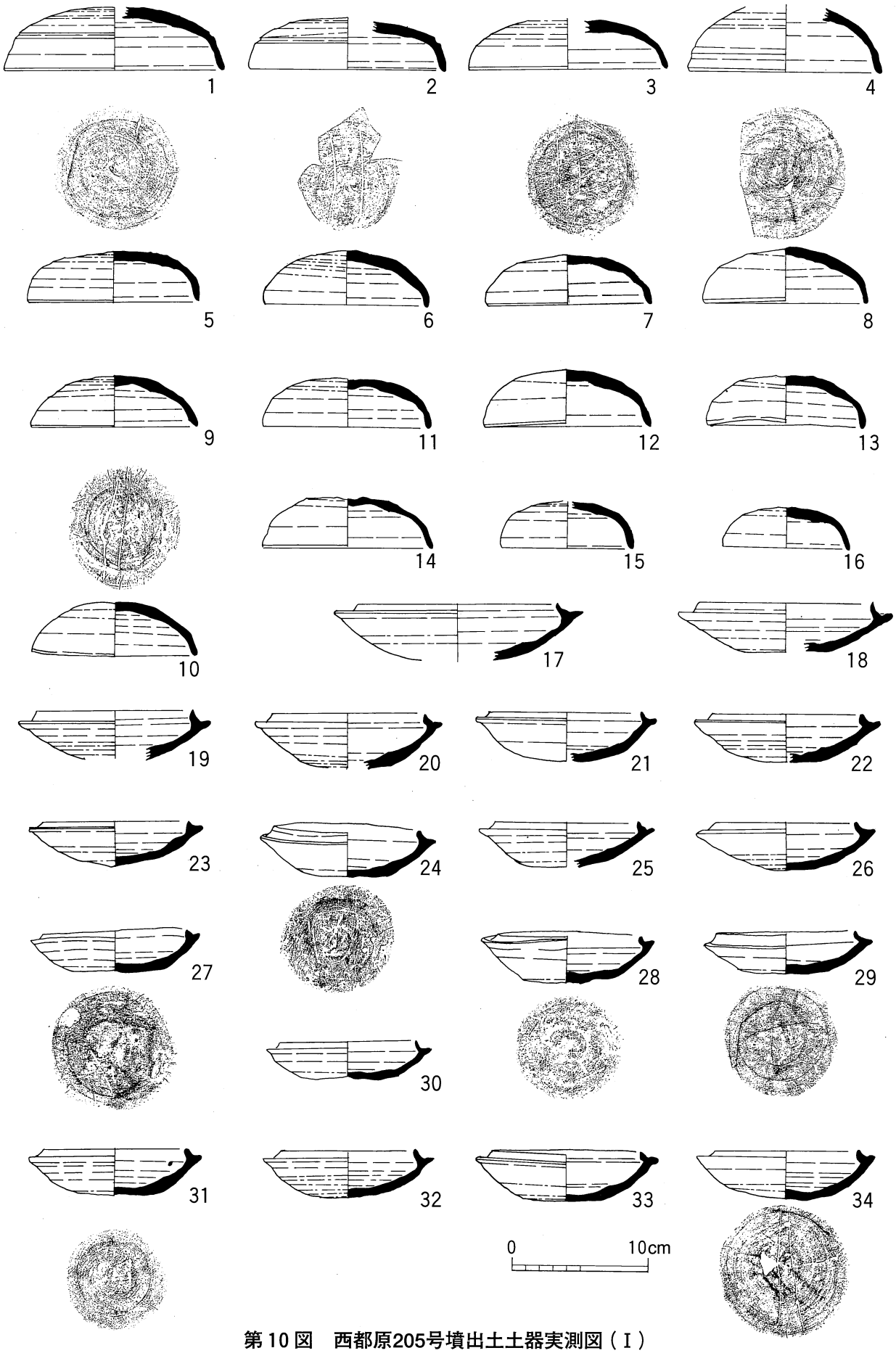
62は63と同タイプであるが、底部に脚が付く。口頸部が大きく外反して伸び、頸部は屈曲して口縁部に続く。頸部に上位の2条の凹線と下位の1条の凹線との間に櫛描きの刻みを施し、端部は丸く仕上げる。胴部は楕円形を呈し、肩部と体部の境に1条の凹線を、その間に櫛描きの刻みを施している。体部に直径1.7㎝の円形穿孔が1有り。底部はヘラ削りを、その他の部位はナデを施している。頸部の内面は絞りを施している。口径は14.3㎝、球形部径は9.8㎝、器高は19.1㎝である。

脚付き長頸壺（第12図64・65）

64は頸部が直に伸び、口縁部を欠如している。胴部は算盤状を呈し、脚を有する。肩部に1条の凹線を、体部の上位に2条の凹線を施している。脚は長方形の三方透かしである。内外面ともナデを施している。胴部の径は17.4㎝である。

短頸壺蓋（第12図67・68）

67は口縁部がほぼ直に伸び、端部は丸い。口縁部の内外面はナデを、天井部はヘラ削りを施し、撮み



第10図　西都原205号墳出土土器実測図（Ⅰ）

を欠如する。口径は１０.０㎝、器高は５.８㎝＋αである。 68は口縁部が斜め上方に伸び、端部は丸い。天井部はヘラ削りを施す。口径は１１.０㎝、、器高は３.７㎝＋αである。

甕（第12図69～72）

69は口縁部が大きく外反し、端部は上下に張り出す。２条の凹線の上下に工具による櫛描きの刻みを入れている。内外面ともナデを施す。

土師器

高坏（第13図73～79）

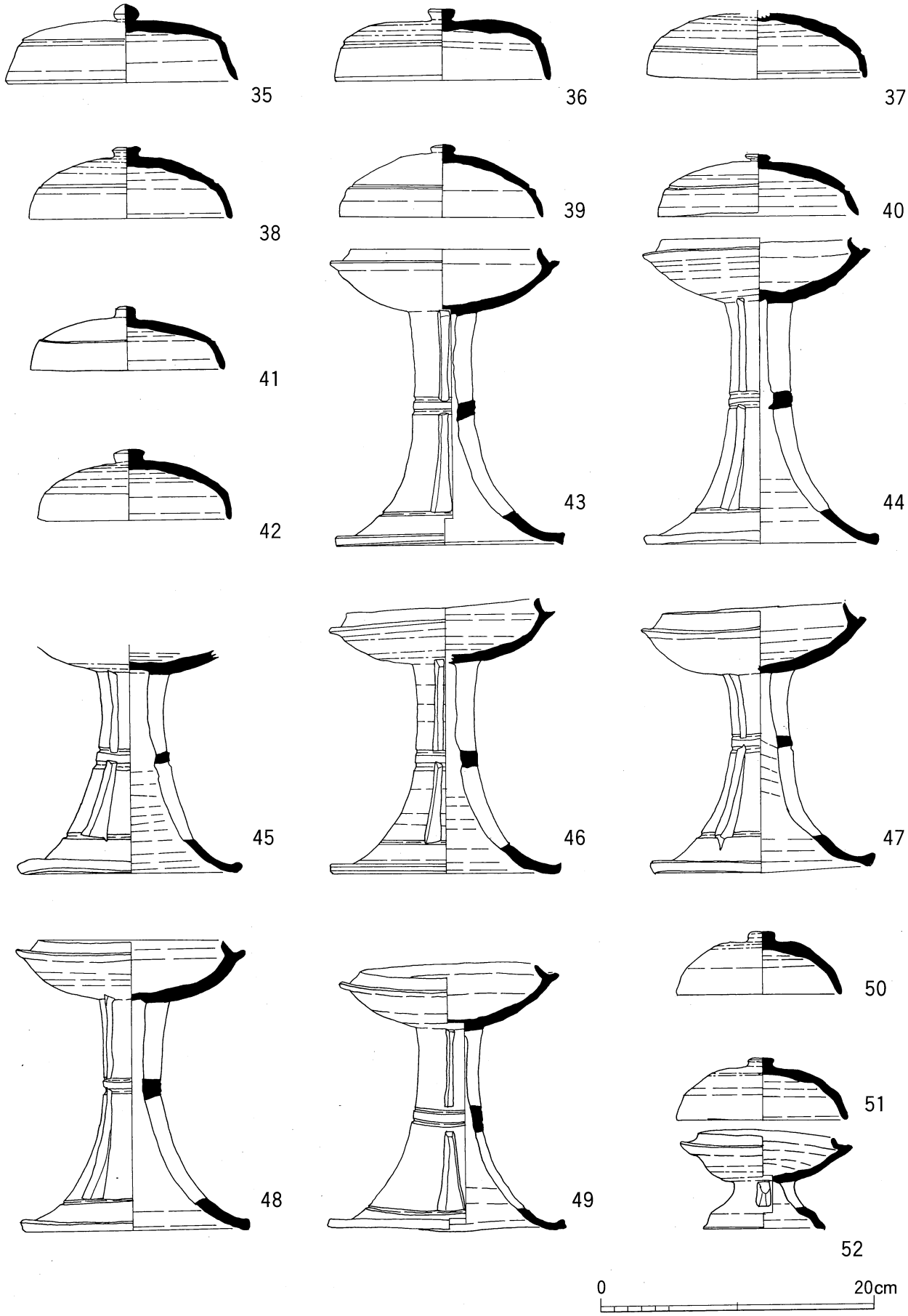
73は坏部が深い埦状で口縁部が若干外反し、口唇部は丸い。脚部は緩やかに外反し、端部で大きく屈曲する。脚端部は丸い。坏部は内外面とも横方向のヘラ磨きを施し、脚部の外面は縦方向のナデを、内面は横方向のナデを施している。口径は25.８㎝、器高は18.０㎝、脚部径11.５㎝である。 74も同タイプで、口径は24.８㎝である。 75は坏部が浅い埦状で口縁部が若干外反し、口唇部は丸い。脚部は端部まで大きく外反する。脚端部は丸い。坏部は内外面とも斜方向のヘラ磨きを施し、脚部の内外面とも斜方向のヘラ磨きを施している。坏部と脚部の起合部は指押さえを施す。全面丹塗りである。口径は20.０㎝、器高は16.８㎝、脚部径13.５㎝である。 76は同タイプで、口径は16.８㎝で、坏部の内外面は横方向のヘラ磨きを施し、脚部外面は縦方向の工具によるナデを施す。 77は坏部が浅い椀状で、途中から口縁部が緩やかに外反し、口唇部は丸い。脚部は端部まで緩やかに外反する。脚端部は丸い。坏部は内外面とも斜方向のヘラ磨きを施し、脚部の外面は縦方向のヘラ磨きを、内面はナデを施している。全面丹塗りである。口径は19.１㎝、器高は15.１㎝、脚部径12.９㎝である。

坏（第13図80～82）

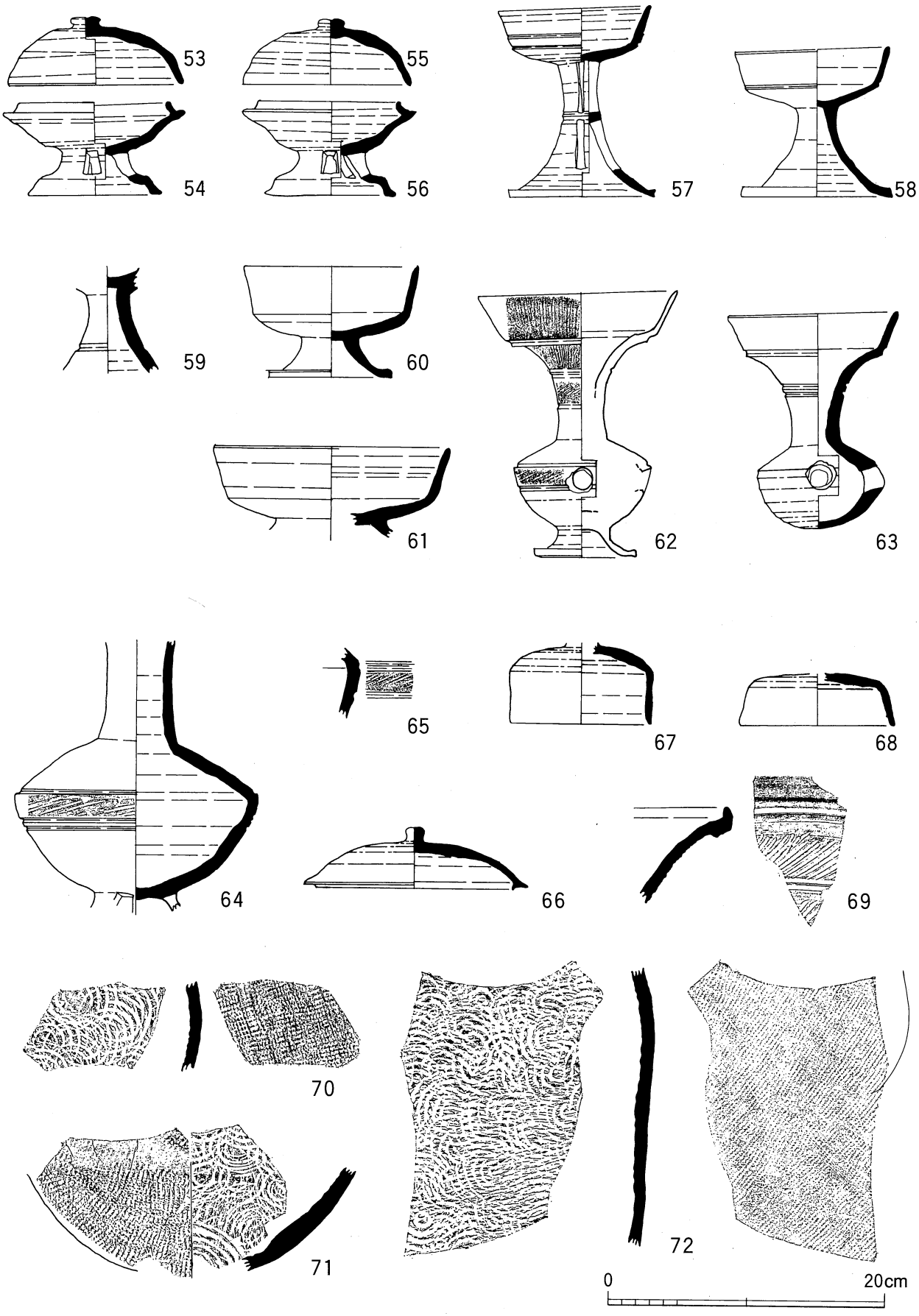
80は丸底で、口縁部が若干外反し、口唇部は丸味を有している。内外面とも横方向のヘラ磨きを施し、底部外面には×印のヘラ記号を有する。口径は15.８㎝、器高は５.４㎝。 81は80より一回り小形で、丸底で、口縁部が緩やかに内湾し、口唇部は丸味を有している。外面は横方向の荒いケズリを、内面はナデを施す。口径は12.３㎝、器高は５.０㎝。 82は平底で、口縁部がほぼ直に立ち上がり、口唇部は丸味を有している。外面は横方向の荒いヘラ磨きとナデを施す。底部の中央を焼成後、穿孔している。口径は12.２㎝、器高は４.８㎝。

第５節　小結

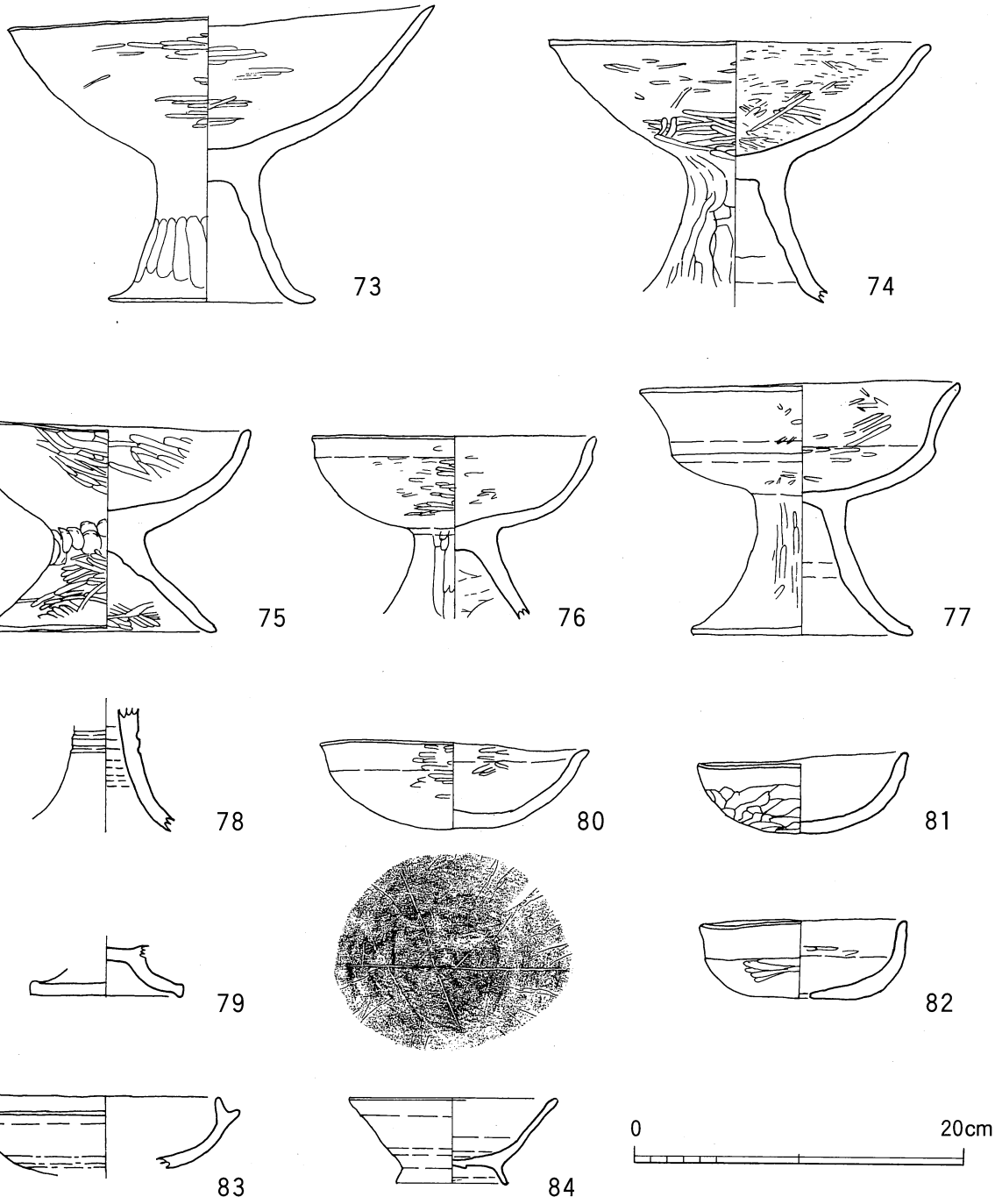
周堀から出土した須恵器はＴＫ43型式～ＴＫ209型式に相当するので６世紀後半には造営されたと考えられる。



第11図　西都原205号墳出土土器実測図（Ⅱ）



第12図　西都原205号墳出土土器実測図（Ⅲ）



第13図　西都原205号墳出土土器実測図（Ⅳ）

西都原205号墳出土土器観察表(1)

図面番号	遺物番号	出土地点 出土遺構	種別	器種部位	法量(cm)				器面調整・手法ほか		色調		胎土	焼成	備考
					口径	器高	受部径	底径	外面	内面	外面	内面			
第10図	1	周溝	須恵器	坏蓋	15.9	4.6			ヨコナデ・ヘラ削り	ヨコナデ・仕上げナデ	灰 (5Y 6/1)	灰 (5Y 6/1)	2.5㎜以下の白色粒を含む	堅緻	
第10図	2	周溝	須恵器	坏蓋	14.2	3.8			ヨコナデ・ヘラ削り	ヨコナデ・仕上げナデ	灰 (5Y 5/1)	灰 (7.5Y 5/1)	2㎜以下の灰・白色粒を含む	堅緻	鬼の窟古墳石室内出土の破片と接合
第10図	3	周溝	須恵器	坏蓋	14.5	3.5			ヨコナデ・ヘラ削り	ヨコナデ	灰 (N 5/0)	灰 (7.5Y 4/1)	精良	堅緻	
第10図	4	周溝	須恵器	坏蓋	13.8	4.7 +α			ヨコナデ・ヘラ削り	ヨコナデ	黄灰 (2.5Y 5/1)	黄灰 (2.5Y 5/1)	1㎜の灰色粒を含む	堅緻	
第10図	5	周溝	須恵器	坏蓋	12.4	3.7			ヨコナデ・ヘラ削り	ヨコナデ・仕上げナデ	灰 (7.5Y 6/1)	灰 (10Y 6/1)	精良	堅緻	自然釉(外面) ヘラ記号(=)
第10図	6	周溝	須恵器	坏蓋	12.0	4.1			ヨコナデ・ヘラ削り	ヨコナデ・仕上げナデ	灰 (N 5)	灰 (5Y 6/1)	4㎜以下の白色粒を含む	堅緻	
第10図	7	周溝	須恵器	坏蓋	11.9	3.7			ヨコナデ・ヘラ削り	ヨコナデ・仕上げナデ	灰 (N 0/)	灰 (N 5/)	2㎜以下の浅黄・乳白色粒を含む	堅緻	自然釉(外面) ヘラ記号(≠)
第10図	8	周溝	須恵器	坏蓋	11.7	4.1			ヨコナデ・ヘラ削り	ヨコナデ・仕上げナデ	灰 (N 4/0)	灰 (N 5/0)	2～3㎜の灰白色粒を含む	堅緻	ヘラ記号(≠)
第10図	9	周溝	須恵器	坏蓋	12.0	3.7			ヨコナデ・ヘラ削り	ヨコナデ・仕上げナデ	灰 (5Y 5/1)	灰 (N 5/)	精良	堅緻	
第10図	10	周溝	須恵器	坏蓋	12.0	4.9			ヨコナデ・ヘラ削り	ヨコナデ・仕上げナデ	灰 (10Y 6/1)	灰 (5Y 5/1)	精良	堅緻	ヘラ切り後、未調整 ヘラ記号(=)
第10図	11	周溝	須恵器	坏蓋	12.1	3.5			ヨコナデ・ヘラ削り	ヨコナデ・仕上げナデ	灰黄 (2.5Y 7/2)	灰黄 (2.5Y 7/4)	2㎜以下の灰・乳白色粒を少し含む	甘い	a群
第10図	12	周溝	須恵器	坏蓋	12.0	4.4			ヨコナデ・ヘラ削り	ヨコナデ・仕上げナデ	灰 (10Y 5/1)	灰 (N 5/)	1.5㎜以下の淡黄・乳白色粒を含む	堅緻	
第10図	13	周溝	須恵器	坏蓋	11.3	3.8			ヨコナデ・ヘラ削り	ヨコナデ・仕上げナデ	灰 (5Y 6/1)	灰 (5Y 6/1)	1.5㎜以下の黒・乳白色粒を含む	堅緻	口縁部にヘラ粒工具による刻みを入れる。a群
第10図	14	周溝	須恵器	坏蓋	11.1	3.7			ヨコナデ・ヘラ削り	ヨコナデ・仕上げナデ	灰 (N 6/)	灰 (N 6/)	2.5㎜以下の灰・淡黄・乳白色粒を含む	堅緻	ヘラ切り後、未調整 a群
第10図	15	周溝	須恵器	坏蓋	9.4	3.5			ヨコナデ・ヘラ削り	ヨコナデ・仕上げナデ	灰 (N 5/)	灰 (5Y 5/1)	精良	堅緻	
第10図	16	周溝	須恵器	坏蓋	9.2	2.9			ヨコナデ・ヘラ削り	ヨコナデ・仕上げナデ	灰 (7.5Y 5/1)	灰 (7.5Y 5/1)	精良	堅緻	
第10図	17	周溝	須恵器	坏身	14.5	3.8 +α			ヨコナデ・ヘラ削り	ヨコナデ・仕上げナデ	灰 (5Y 4/1)	灰 (5Y 4/1)	精良	堅緻	
第10図	18	周溝	須恵器	坏身	12.6	4.6	15.0		ヨコナデ・ヘラ削り	ヨコナデ・仕上げナデ	暗灰 (N 3/1)	灰 (5Y 6/1)	精良	堅緻	
第10図	19	周溝	須恵器	坏身	11.4	3.6	14.0		ヨコナデ・ヘラ削り	ヨコナデ	灰 (5Y 5/1)	灰 (5Y 6/1)	精良	堅緻	

西都原205号墳出土土器観察表(2)

図面番号	遺物番号	出土地点 出土遺構	種別	器種 部位	法量(cm)				器面調整・手法ほか		色調		胎土	焼成	備考
					口径	器高	受部径	底径	外面	内面	外面	内面			
第10図	20	周溝	須恵器	坏身	11.2	4.1	13.6		ヨコナデ・ヘラ削り	ヨコナデ・仕上げナデ	灰 (7.5Y 5/1)	灰 (N 4/)	1.5㎜以下の灰白色粒を含む	堅緻	
第10図	21	周溝	須恵器	坏身	10.9	3.6	13.2		ヨコナデ	ヨコナデ	灰黄 (2.5Y 6/2)	灰黄 (2.5Y 6/2)	1~3㎜の灰白色粒を含む	甘い	赤色顔料(外面)
第10図	22	周溝	須恵器	坏身	10.8	3.4	13.6		ヨコナデ・ヘラ削り	ヨコナデ	灰 (N 4/0)	灰 (N 4/0)	1㎜の灰白色粒を含む	堅緻	
第10図	23	周溝	須恵器	坏身	10.8	4.2	12.8		ヨコナデ・ヘラ削り	ヨコナデ・仕上げナデ	灰 (7.5Y 6/1)	灰 (7.5Y 5/1)	精良	堅緻	自然釉(外面)
第10図	24	周溝	須恵器	坏身	10.6	3.3	12.8		ヨコナデ	ヨコナデ	灰 (10Y 5/1)	灰 (10Y 5/1)	2㎜以下の白・灰色粒を含む	堅緻	木ノ葉痕 a群
第10図	25	周溝	須恵器	坏身	10.4	3.3	13.0		ヨコナデ・ヘラ削り	ヨコナデ・仕上げナデ	灰 (10Y 4/1)	灰 (10Y 4/1)	精良	堅緻	
第10図	26	周溝	須恵器	坏身	10.2	3.4	13.0		ヨコナデ・ヘラ削り	ヨコナデ・仕上げナデ	オリーブ灰 (5GY 6/1)	オリーブ灰 (5GY 6/1)	1.5㎜以下の灰白・淡黄色粒を含む	堅緻	a群
第10図	27	周溝	須恵器	坏身	10.5	3.1	12.2		ヨコナデ・ヘラ削り	ヨコナデ・仕上げナデ	灰 (5Y 5/1)	黄灰 (2.5Y 5/1)	精良	堅緻	自然釉(外面) a群
第10図	28	周溝	須恵器	坏身	10.3	3.8	12.6		ヨコナデ	ヨコナデ・仕上げナデ	灰 (5Y 5/1)	灰 (5Y 5/1)	2~3㎜の灰白色粒を含む	堅緻	ヘラ切り後、未調整 ヘラ記号、a群 自然釉(外面)
第10図	29	周溝	須恵器	坏身	10.0	3.2	12.3		ヨコナデ・ヘラ削り	ヨコナデ・仕上げナデ	灰 (10Y 6/1)	灰 (10Y 6/1)	1~3㎜の灰白色粒を含む	堅緻	自然釉(外面) a群
第10図	30	周溝	須恵器	坏身	10.0	2.8	12.2		ヨコナデ・ヘラ削り	ヨコナデ・仕上げナデ	黄灰 (2.5Y 5/1)	黄灰 (2.5Y 6/1)	精良	堅緻	自然釉(外面) a群
第10図	31	周溝	須恵器	坏身	10.5	3.5	12.7		ヨコナデ・ヘラ削り	ヨコナデ・仕上げナデ	灰 (7.5Y 5/1)	灰 (7.5Y 5/1)	精良	堅緻	ヘラ記号(=) a群
第10図	32	周溝	須恵器	坏身	9.8	4.5	12.5		ヨコナデ・ヘラ削り	ヨコナデ	オリーブ灰 (2.5GY 5/1)	暗オリーブ灰 (2.5GY 4/1)	精良	堅緻	a群
第10図	33	周溝	須恵器	坏身	10.9	3.8	13.4		ヨコナデ・ヘラ削り	ヨコナデ・仕上げナデ	灰 (N 6/)	灰 (N 6/)	2㎜以下の灰白色粒を含む	堅緻	
第10図	34	周溝	須恵器	坏身	10.5	3.5	13.0		ヨコナデ・ヘラ削り	ヨコナデ・仕上げナデ	灰 (5Y 6/1)	灰 (5Y 5/1)	精良	堅緻	ヘラ切り後、未調整 ヘラ記号(=)
第11図	35	周溝	須恵器	高坏蓋	16.7	5.7			ヨコナデ・ヘラ削り	ヨコナデ・仕上げナデ	灰 (N 5)	灰 (N 5)	3㎜以下の白色粒を含む	堅緻	
第11図	36	周溝	須恵器	高坏蓋	15.5	5.2			ヨコナデ・ヘラ削り	ヨコナデ・仕上げナデ	灰 (N 5)	灰 (N 5)	2㎜以下の灰・白色粒を含む	堅緻	
第11図	37	周溝	須恵器	高坏蓋	15.8	4.9 +α			ヨコナデ・ヘラ削り	ヨコナデ	灰 (N 6/)	灰 (N 6/)	1㎜以下の黄白・暗褐色粒を少し含む	堅緻	撮み欠如
第11図	38	周溝	須恵器	高坏蓋	14.5	5.2			ヨコナデ・ヘラ削り	ヨコナデ・仕上げナデ	灰 (5Y 5/1)	黄灰 (2.5Y 5/1)	1.5㎜以下の灰白色粒を含む	堅緻	

西都原205号墳出土土器観察表(3)

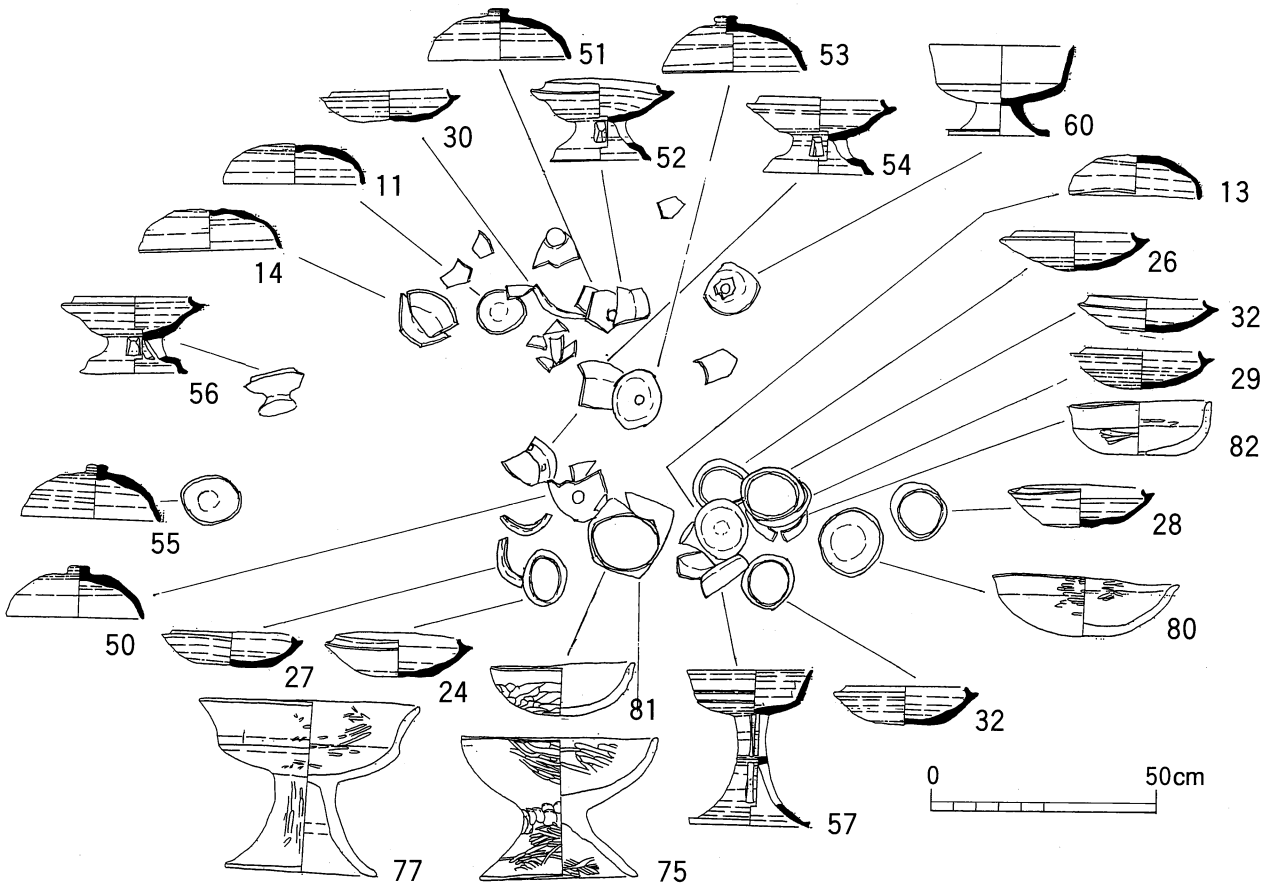
図面番号	遺物番号	出土地点出土遺構	種別	器種部位	法量(cm)				器面調整・手法ほか		色調		胎土	焼成	備考
					口径	器高	受部径	底径	外面	内面	外面	内面			
第11図	39	周溝	須恵器	高坏蓋	14.7	5.3			ヨコナデ・ヘラ削り	ヨコナデ・仕上げナデ	灰(5Y 5/1)	灰(5Y 5/1)	2㎜の灰白色粒を含む	堅緻	自然釉(外面)
第11図	40	周溝	須恵器	高坏蓋	14.5	4.5			ヨコナデ・ヘラ削り	ヨコナデ・仕上げナデ	灰(10Y 6/1)	灰(N 5/0)	1～3㎜の灰白色粒を含む	堅緻	
第11図	41	周溝	須恵器	高坏蓋	14.0	4.7			ヨコナデ・ヘラ削り	ヨコナデ・仕上げナデ	灰(N 6/)	灰(N 5/)	1㎜以下の浅黄色粒を含む	堅緻	自然釉(外面)
第11図	42	周溝	須恵器	高坏蓋	14.0	5.2			ヨコナデ・ヘラ削り	ヨコナデ・仕上げナデ	灰(5Y 5/1)	灰(5Y 5/1)	1.5㎜以下の乳白・白色粒を含む	堅緻	自然釉(外面)
第11図	43	周溝	須恵器	高坏	13.7	21.7	16.7	16.5	ヨコナデ	ヨコナデ・仕上げナデ	灰(N 5/)	灰(N 5/)	1.5～3.5㎜の浅黄・乳白色粒を含む	堅緻	長方形透し三方 b群
第11図	44	周溝	須恵器	高坏	13.7	22.4	16.6	16.7	ヨコナデ	ヨコナデ	灰(5Y 6/1)	灰(5Y 6/1)	2㎜以下の灰白色粒を含む	堅緻	長方形透し三方 b群
第11図	45	周溝	須恵器	高坏		33.2 +α		15.4	ヨコナデ	ヨコナデ	暗灰(N 3)	灰(7.5Y 5/1)	3㎜以下の白色粒を含む	堅緻	長方形透し三方 自然釉(外面) 鬼の窟古墳と接合 b群
第11図	46	周溝	須恵器	高坏	14.0	19.3	16.4	16.6	ヨコナデ・ヘラ削り	ヨコナデ・仕上げナデ	灰(N 5/)	灰(5Y 5/1)	精良	堅緻	長方形透し三方 b群
第11図	47	周溝	須恵器	高坏	13.2	19.7	16.3	16.3	ヨコナデ	ヨコナデ	灰(N 4/0)	灰(10Y 6/0)	精良	堅緻	自然釉(外面) 長方形透し三方
第11図	48	周溝	須恵器	高坏	13.4	21.2	16.1	15.7	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白(10Y 7/1)	灰白(10Y 7/1)	精良	堅緻	長方形透し三方
第11図	49	周溝	須恵器	高坏	12.8	19.6	15.8		ヨコナデ	ヨコナデ	灰白(5Y 7/1)	灰(7.5Y 6/1)	1㎜以下の灰白色粒を含む	堅緻	長方形透し二方
第11図	50	周溝	須恵器	高坏蓋	12.1	4.6			ヨコナデ・ヘラ削り	ヨコナデ・仕上げナデ	灰(5Y 4/1)	浅黄(2.5Y 7/3)	3㎜以下の灰色粒を含む	堅緻	a群
第11図	51	周溝	須恵器	高坏蓋	12.3	4.6			ヨコナデ・ヘラ削り	ヨコナデ・仕上げナデ	灰(5Y 5/1)	灰(5Y 5/1)	精良	堅緻	a群
第12図	52	周溝	須恵器	高坏	9.8	7.3	12.6	8.8	ヨコナデ	ヨコナデ	灰(7.5Y 6/1)	灰(7.5Y 6/1)	2㎜以下の灰白・灰・橙色粒を含む	堅緻	a群 長方形二方透し
第12図	53	周溝	須恵器	高坏蓋	12.4	4.9			ヨコナデ・ヘラ削り	ヨコナデ・仕上げナデ	灰(5Y 6/1)	灰黄(2.5Y 6/2)	精良	やや軟	a群
第12図	54	周溝	須恵器	高坏	10.7	6.8	13.1	9.6	ヨコナデ・ヘラ削り	ヨコナデ・仕上げナデ	灰(N 5/)	灰(N 5/)	1㎜以下の黄白・灰白色粒を含む	堅緻	a群 長方形透し二方
第12図	55	周溝	須恵器	高坏蓋	11.9	4.7			ヨコナデ・ヘラ削り	ヨコナデ・仕上げナデ	灰(5Y 5/1)	灰(N 5)	3㎜以下の灰・白色粒を含む	堅緻	a群
第12図	56	周溝	須恵器	高坏	10.0	6.9	12.5	9.4	ヨコナデ・ヘラ削り	ヨコナデ・仕上げナデ	灰白(7.5Y 7/1)	灰白(5Y 7/1)	2㎜以下の白・灰白色粒を含む	堅緻	a群 長方形二方透し
第12図	57	周溝	須恵器	高坏	10.8	13.6		10.3	ヨコナデ	ヨコナデ	灰(7.5Y 5/1)	灰(7.5Y 5/1)	1㎜以下の灰白・白色粒を含む	堅緻	a群 長方形二方透し 自然釉(内外面)

西都原205号墳出土土器観察表(4)

図面番号	遺物番号	出土地点 出土遺構	種別	器種 部位	法量(cm)				器面調整・手法ほか		色調		胎土	焼成	備考
					口径	器高	受部径	底径	外面	内面	外面	内面			
第12図	58	周溝	須恵器	高坏	11.0	10.6		10.8	ヨコナデ・ヘラ削り	ヨコナデ・仕上げナデ	黄灰 (2.5Y 6/1)	灰白 (5Y 7/1)	精良	堅緻	自然釉(外面)
第12図	59	周溝	須恵器	高坏		7.5 +α			ヨコナデ	ナデ	灰 (5Y 6/1)	灰白 (5Y 6/1)	1㎜の灰白色粒を含む	良好	
第12図	60	周溝	須恵器	高坏	12.4	8.0		8.8	ナデ	ナデ・仕上げナデ	灰 (5Y 5/1)	灰 (5Y 5/1)	1.5㎜以下の灰白・乳白色粒を含む	堅緻	a群
第12図	61	周溝	須恵器	高坏	16.7	6.5 +α			ナデ	ナデ・仕上げナデ	灰 (N 6/0)	灰 (N 6/0)	精良	堅緻	
第12図	62	周溝	須恵器	脚付 瑯	14.3	19.1		5.9	ナデ・ヘラ削り	ナデ	灰 (5Y 5/1)	灰 (N 5/)	1.5㎜以下の淡黄・灰・灰白色粒を含む	堅緻	斜方向の刻み目
第12図	63	周溝	須恵器	瑯	12.1	15.4			ナデ・ヘラ削り	ナデ・シボリ	灰 (10Y 5/1)	灰 (5Y 5/1)	精良	堅緻	自然釉(外面)
第12図	64	周溝	須恵器	脚付 長頸壺		19.0 +α		17.6	ナデ	ヨコナデ	灰 (5Y 4/1)	黄灰 (2.5Y 6/1)	精良	堅緻	自然釉(外面) 鬼の窟と接合 斜方向のヘラ沈線文 長方形透し
第12図	65	周溝	須恵器	壺					ナデ	ナデ	暗灰 (N 3/0)	灰 (N 4/0)	精良	堅緻	櫛描列点文
第12図	66	周溝	須恵器	蓋	14.1	4.5	16.1		ナデ・ヘラ削り	ナデ・仕上げナデ	灰 (10Y 6/1)	灰 (N 4/)	1㎜以下の黄色粒を含む	堅緻	
第12図	67	周溝	須恵器	蓋	9.9	5.8 +α			ナデ・ヘラ削り	ナデ	暗灰黄 (2.5Y 5/6)	褐灰 (10YR 4/1)	1㎜以下の黄白・黒褐色粒を含む	堅緻	撮み欠如 鬼の窟と接合
第12図	68	周溝	須恵器	蓋	11.0	3.7 +α			ナデ・ヘラ削り	ナデ	灰 (N 4/)	灰 (N 6/)	2㎜以下の灰白・灰色粒を含む	堅緻	
第12図	69	周溝	須恵器	甕					ナデ	ヨコナデ	灰 (N 4/)	灰白 (5Y 7/1)	1.5㎜以下の灰白色粒を少し含む	堅緻	自然釉(外面) 工具による沈線文
第12図	70	周溝	須恵器	甕					格子目叩キ	同心円叩キ	灰 (5Y 6/1)	灰 (5Y 6/1)	1㎜の浅黄色粒を含む	堅緻	
第12図	71	周溝	須恵器	甕					格子目叩キ	同心円叩キ	灰 (5Y 6/1)	灰 (5Y 6/1)	1㎜の浅黄色粒を含む	堅緻	
第12図	72	周溝	須恵器	甕					格子目叩キ	同心円叩キ	灰 (N 5/0)	灰 (N 5/0)	1~3㎜の灰白色粒を含む	堅緻	
第13図	73	周溝	土師器	高坏	25·8	18.0		11.5	ヘラ磨キ・指ナデ ヨコナデ	ヘラ磨キ・ナデ	にぶい黄橙 (10YR 6/4)	にぶい赤褐 (5YR 6/4)	2㎜以下の褐・黒褐色粒を含む	良好	
第13図	74	周溝	土師器	高坏	24,8				ヘラ磨キ・ヘラ削り	ヘラ磨キ・指押え ナデ	橙 (5YR 6/5)	橙 (5YR 6/6)	1㎜以下の褐・黒褐色粒を含む	良好	
第13図	75	周溝	土師器	高坏	20.0	16.8		13.6	ヘラ磨キ・指押え	ヘラ磨キ・指押え	明赤褐 (5YR 5/6)	明赤褐 (5YR 5/6)	精良	良好	丹塗り(内外面) a群
第13図	76	周溝	土師器	高坏	16.8	10.4 +α				ヘラ磨キ 工具によるナデ	橙 (7.5YR 6/6)	橙 (7.5YR 6/6)	2㎜以下の茶・黒・透明粒を含む	良好	

西都原205号墳出土土器観察表(5)

図面番号	遺物番号	出土地点 出土遺構	種別	器種 部位	法量(cm)				器面調整・手法ほか		色調		胎土	焼成	備考
					口径	器高	受部径	底径	外面	内面	外面	内面			
第13図	77	周溝	土師器	高坏	19.1	15.1		12.9	ヘラ磨キ・ナデ	ヘラ磨キ・ナデ	橙 (5YR 7/8)	橙 (2.5YR 6/8)	2㎜以下の半透明・黒色粒を含む	良好	丹塗り(内外面) a群
第13図	78	周溝	土師器	高坏					ナデ	工具によるナデ	浅黄橙 (10YR 8/4)	浅黄橙 (10YR 8/4)	1㎜以下の灰白・灰・黒褐色粒を含む	良好	
第13図	79	周溝	土師器	高坏脚部				9.1	ナデ	ナデ	橙 (7.5YR 7/6)	橙 (7.5YR 7/6)	2㎜以下の茶色粒を含む	良好	
第13図	80	周溝	土師器	坏	15.8	5.4			ヘラ磨キ	ヘラ磨キ	橙 (5YR 7/6)	橙 (7.5YR 7/6)	1㎜以下の茶・黒色粒を含む	良好	ヘラ記号(×)
第13図	81	周溝	土師器	坏	12.3	5.0			粗い削り	ナデ	橙 (7.5YR 7/6)	橙 (5YR 6/6)	3㎜以下の茶・白・灰色粒を含む	良好	a群
第13図	82	周溝	土師器	坏	12.2	4.8			ヘラ磨キ・ナデ	ヘラ磨キ	橙 (5YR 6/6)	橙 (5YR 6/6)	3㎜以下の茶・褐色粒を含む	良好	丹塗り(内外面) a群
第13図	83	周溝	土師器	坏	13.7	4.9 +α	16.3		ナデ・ヘラ削り	ヨコナデ	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	3㎜以下の茶色粒を含む	良好	丹塗り(内外面) a群
第13図	84	周溝	土師器	高台付埦	12.4	5.2		6.6	ナデ	ナデ	浅黄橙 (7.5YR 8/6)	浅黄橙 (10YR 8/4)	1㎜以下の赤褐色粒を少し含む	良好	



第14図　西都原205号墳周溝a群出土状況図

第Ⅳ章　まとめ

1　横穴式石室

県内の横穴式石室として現在確認できるのは13例あり、可能性があるのを含めると２０例である。確実な事例は北から五ヶ瀬川右岸の南方古墳群の２号墳（延岡市天下町、径25ｍの円墳）・24号墳[1]（延岡市大貫町、径21ｍの円墳）、塩見川左岸の伊勢ヶ浜古墳群の６号墳（日向市日知屋、径10ｍの円墳）・７号墳[2]（径13ｍの円墳）、小丸川左岸の持田古墳群の84号墳[3]（高鍋町持田、円墳）・無号古墳[4]（墳形不明）、永山古墳[5]（木城町高城、墳形不明、ＴＫ43型式）、一ツ瀬川右岸の西都原古墳群の鬼の窟古墳（西都市三宅、径37ｍの円墳）、同左岸の新田原古墳群（石船古墳群）の44号墳（新富町新田、一辺26ｍの方墳、隼上りⅡ段階）・45号墳[6]（主軸長65ｍの前方後円墳、ＴＫ43型式）、千畑古墳[7]（西都市穂北、主軸長40ｍの前方後円墳）、広渡川左岸の狐塚古墳[8]（日南市風田、墳形不明、隼上りⅡ段階）、本城川左岸の鬼ヶ城１号墳[9]（串間市崎田、墳形不明）などがある。時期幅としてはＴＫ43型式（６世紀第４四半期）～隼上りⅡ段階（７世紀第２四半期）で、５世紀に遡るものは確認されていない。また１古墳群内に数基であり、北部九州などに見られる横穴式石室の群集墳はない。なお墳形は前方後円墳が２基、方墳が１基で、円墳が５基であり、前方後円墳は40ｍ～65ｍの小規模前方後円墳、円墳は鬼の窟古墳を除くと径10ｍ～25ｍの小円墳である。

柳沢一男氏は県内の横穴式石室を４つに分類し、鬼の窟古墳・千畑古墳・狐塚古墳は構築石材が砂岩塊石を主体にし、玄室の長さが幅の２倍程度の長方形のもののＡ型式に分類し、鬼の窟古墳は平林古墳（奈良県新城町）との近似を指摘し、千畑古墳の次の段階の隼上りＩ段階に比定されている[10]。

石室の構造からすれば柳沢氏が指摘するように「平林式」に分類され、６世紀第４四半期に比定されている[11]。また玄室の中心と墳丘の中心を一致させようとしているのは、畿内地方では７世紀の古墳に見られるタイプで、その先駆的な古墳である藤ノ木古墳では６世紀第４四半期である[12]。以上のように石室の構造からは６世紀第４四半期に比定される。

2　須恵器

県内の古墳時代須恵器の編年は石川恒太郎氏の「宮崎県の考古学」の末尾の編年表[13]が最初であり、福尾正彦氏[14]は小田富士雄編年[15]を基礎にしているが、生産地の窯跡の調査が全然なされていないので、消費地である古墳の副葬品及び住居跡の出土品を基礎にせざるをえない[16]。そのため北部九州及び陶邑などの他地域の編年に依拠している。

鬼の窟古墳、205号墳から出土した坏蓋は、Ａ類（口径13．8～15．2㎝）、Ｂ類（口径11．1～12．4㎝）、Ｃ類（口径９．２～９．４㎝）の３類に分かれるが、鬼の窟古墳がＢ類のみであるのに対して、205号墳はＡ～Ｃ類の３類すべて揃っている。なお三浦　敏氏が鬼の窟古墳で表採した坏蓋[17]は口径15．２㎝でＡ類に属する。

高坏はＡ類（有蓋長脚二段透し高坏）、Ｂ類（有蓋短脚方形透し高坏）、Ｃ類（無蓋長脚高坏）、Ｄ類（無蓋長脚高坏）、Ｅ類（無蓋短脚高坏）に分かれる。205号墳はＡ類には三方透かし６個体に対して１個体は二方透かしを含んでおり、新しい様相を示している。両者が共存する時期は田辺昭三氏の陶邑編年[18]によればＴＫ209形式に対応する。Ｂ類（有蓋短脚方形透し高坏）は坏身のＢ類に対応する。

藤ノ木古墳[19]出土の有蓋長脚二段透し高坏と比較すると、法量では高坏Ａ類と蓋Ａ―１類が一致する。Ａ

—2類が一回り小さく、一致しない。藤ノ木古墳出土の有蓋長脚二段透し高坏が三方透かしのみであるのに対し、205号墳は7個体中1個体は二方透かしであり、新しい様相が見られる。無蓋高坏C類は法量のうち口径が一回り小さい。なお酒元ノ上横穴墓群[20]出土の坏蓋は口径10㎝以下であり、西都原205号墳の坏C類に相当する。

出土した須恵器を陶邑編年に対応させると、坏A類・高坏A類（三方透かし）はTK43型式（Ⅱ型式第4段階[21]）、坏B類・高坏A類（二方透かし）、高坏B・高坏C・高坏E類はTK209型式（Ⅱ型式第5段階、隼上り1段階[22]）、坏C類はTK217型式（Ⅱ型式第6段階、隼上りⅡ段階）に相当する。この須恵器の年代からすれば、205号墳の築造時期はTK209型式（Ⅱ型式第5段階、隼上りⅠ段階）の7世紀第1四半期に比定される。鬼の窟古墳は調査で出土した須恵器からTK209型式（Ⅱ型式第5段階、隼上りⅡ段階）の7世紀第1四半期に比定されるが、三浦　敏氏表採の須恵器はTK43型式（Ⅱ型式第4段階）の6世紀第4四半期に比定されるので、初葬がTK43型式の時期、追葬がTK209型式の時期に比定される。

なお、205号墳周溝出土の高坏（45）、脚付長頸壺（64）に鬼の窟古墳の石室内の破片と接合するので、主墳と陪塚という関係が裏付けられた。

3　馬具

県内の馬具を出土した古墳は67基の古墳・地下式横穴墓・横穴墓から71組以上の馬具が出土し、そのうち時期の分かる34組の馬具のうち、TK47型式以前が6、MT15型式～TK10型式が8、TK10型式～TK43型式が4、TK209型式が11で、他地域に比べMT15型式以前に属する古式の馬具がかなり多いと指摘されている[23]。また日向地域の馬具の主流は鉄製楕円形鏡板付轡や環状鏡板付轡に代表される鉄製の馬具と指摘されている[24]。特に鉄製楕円形鏡板付轡が多量に出土する地域は全国的になく、その大半がえびの周辺に集中している。

金銅装馬具を出土した古墳は一本木横穴墓[25]（鐘形杏葉、TK10・TK209型式）、持田56号墳[26]（心葉形鏡板付轡・杏葉、TK43型式）、西都原古墳群[27]（心葉形十文字鏡板付轡・杏葉、TK43型式）、百塚原古墳群[28]（龍文鏡板付轡・心葉形杏葉）、下北方5号地下式横穴墓[29]（心葉形杏葉、TK47型式）などで、非常に少数であり、有力な首長墓から出土している。鬼の窟古墳からも金銅装の飾金具が出土し、金胴装馬具を副葬していたと推定されることから、被葬者が首長層であることが確認された。

4　二重周溝を有する古墳

県内の二重周溝を有する円墳としては、藏薗古墳群[30]（新富町三納代、径19．5ｍの円墳を含む3基）、北原牧古墳群[31]（新富町三納代、径34ｍの円墳、6世紀後半）、酒元ノ上横穴墓群（西都市三宅、径14ｍの円墳、7世紀第1四半期）、東二原古墳群[32]（小林市東二原、径22ｍの円墳、地下式横穴墓群16基は5世紀末～6世紀前半）で調査されている。東二原古墳を除くとTK43型式～TK209型式の6世紀第4四半期から7世紀第1四半期である。

以上の4点から鬼の窟古墳は初葬がTK43型式の時期である6世紀第4四半期、追葬がTK209型式の時期の7世紀第1四半期に比定される。一方、205号墳はTK209型式の時期の7世紀第1四半期に比定される。

(註)

(1) 鳥居龍蔵『上代の日向延岡』昭和10年（1935）

(2) 註1文献、日向市教育委員会『日向市遺跡詳細分布調査報告書』昭和60年（1985）

(3) 西谷真治「持田84号墳」『宮崎県史　資料編　考古2』平成5年（1993）

(4) 谷口武範「持田古墳群」『宮崎県史　資料編　考古2』平成5年（1993）

(5) 木城町教育委員会「永山古墳」『木城町文化財調査報告書』第2集　平成2年（1990）

(6) 梅原末治「新田原古墳調査報告」『宮崎県史蹟名勝天然記念物調査報告』第11輯　昭和16年（1941）

(7) 柳沢一男「宮崎県の古墳資料（1）」『宮崎考古』第13号　平成6年（1994）

(8) 日南市教育委員会「狐塚古墳」『平成6年度日南市内遺跡発掘調査報告』平成7年（1995）

(9) 串間市教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』平成2年（1990）

(10) 註7文献に同じ

(11) 白石太一郎「古代史のなかの藤ノ木古墳」『藤ノ木古墳』平成7年（1995）

(12) 註12文献に同じ

(13) 石川恒太郎『宮崎県の考古学』昭和43年（1968）

(14) 福尾正彦「宮崎県内の須恵器—地下式横穴・高塚古墳出土例を中心として—」『古文化談叢』第6集　昭和54年（1979）

(15) 小田富士雄「須恵器の編年」『九州考古学研究　古墳時代編』昭和54年（1979）

(16) 長津宗重「宮崎平野部須恵器編年図（案）」『市ノ瀬地下式横穴墓群』昭和61年（1986）

(17) 註14文献に同じ

(18) 田辺昭三『須恵器大成』昭和56年（1981）

(19) 奈良県立橿原考古学研究所『藤ノ木古墳概報』平成元年（1989）

(20) 西都市教育委員会「西都原地区遺跡」『西都市文化財発掘調査報告書』第22集　平成8年（1996）

(21) 中村　浩「和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」『陶邑Ⅲ』「大阪府文化財調査報告書」第3輯　昭和53年（1978）

(22) 菱田哲郎「畿内の初期瓦生産と工人の動向」『史林』第69巻第3号　昭和61年（1986）

(23) 宮代栄一「宮崎県出土の馬具」『九州考古学』第70号　平成7年（1995）

(24) 註23文献に同じ

(25) 柳　宏吉「横穴古墳（高千穂町）」『宮崎県文化財調査報告書』第3輯　昭和33年（1958）

(26) 梅原末治『持田古墳群』第3輯　昭和44年（1969）

(27) 註23文献に同じ

(28) 東京国立博物館『日本国宝展』図録　平成2年（1990）

(29) 宮崎市教育委員会「下北方地下式横穴第5号」『宮崎市文化財調査報告書』第3集　昭和52年（1977）

(30) 新富町教育委員会「北原牧地区遺跡」『新富町文化財調査報告書』第7集　昭和63年（1988）

(31) 註25文献に同じ

(32) 小林教育委員会「東二原地下式横穴墓群」『小林市文化財調査報告書』第2集　平成2年（1990）

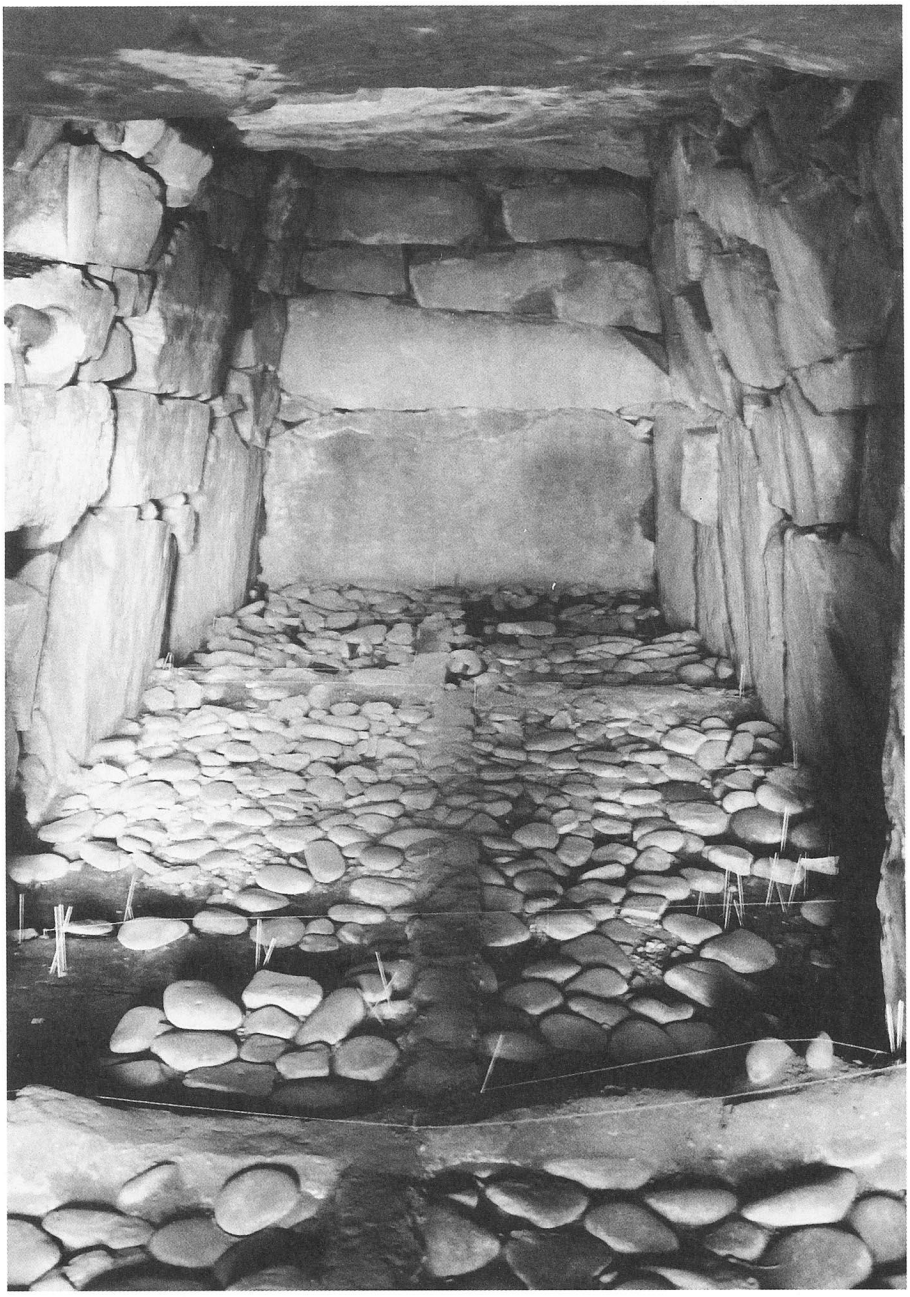
西都原古墳群遠景（南から）

図版1

図版2

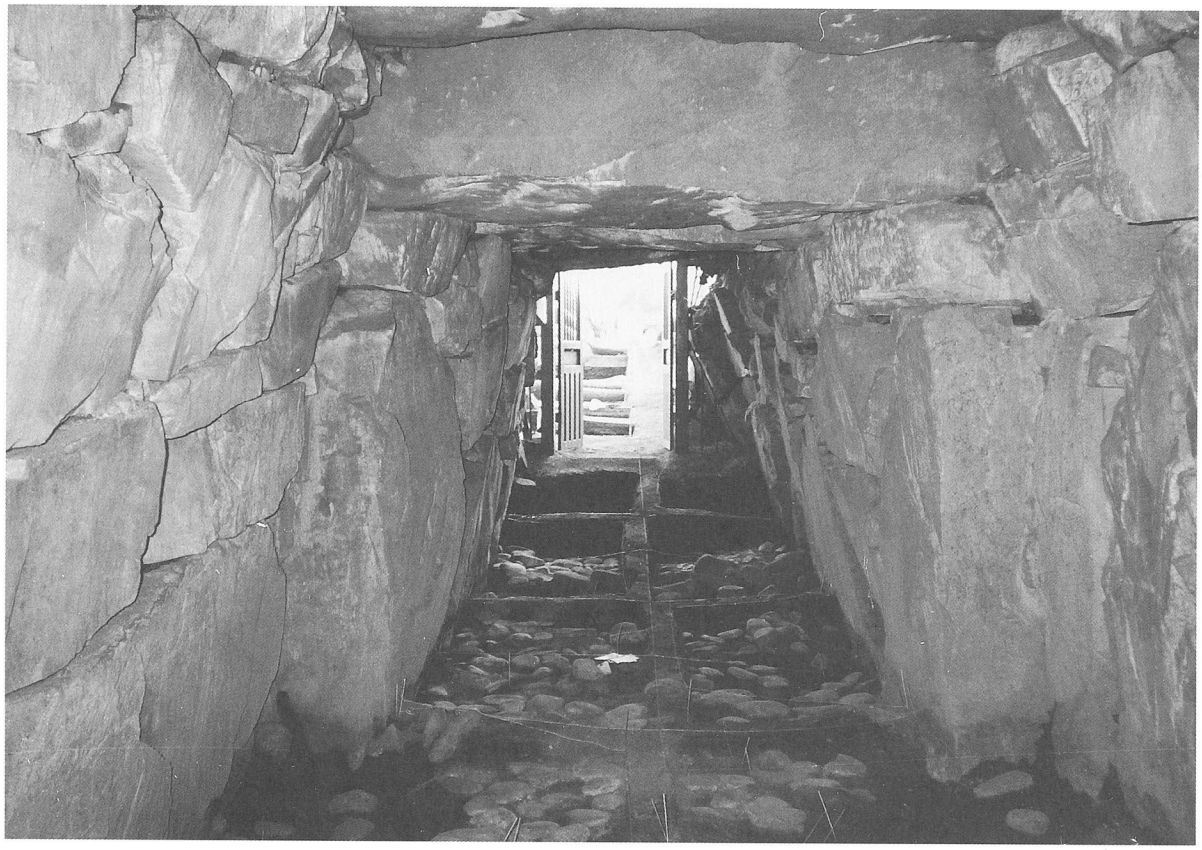
鬼の窟古墳（南面）

鬼の窟古墳（北トレンチ）



鬼の窟古墳石室玄室

図版4



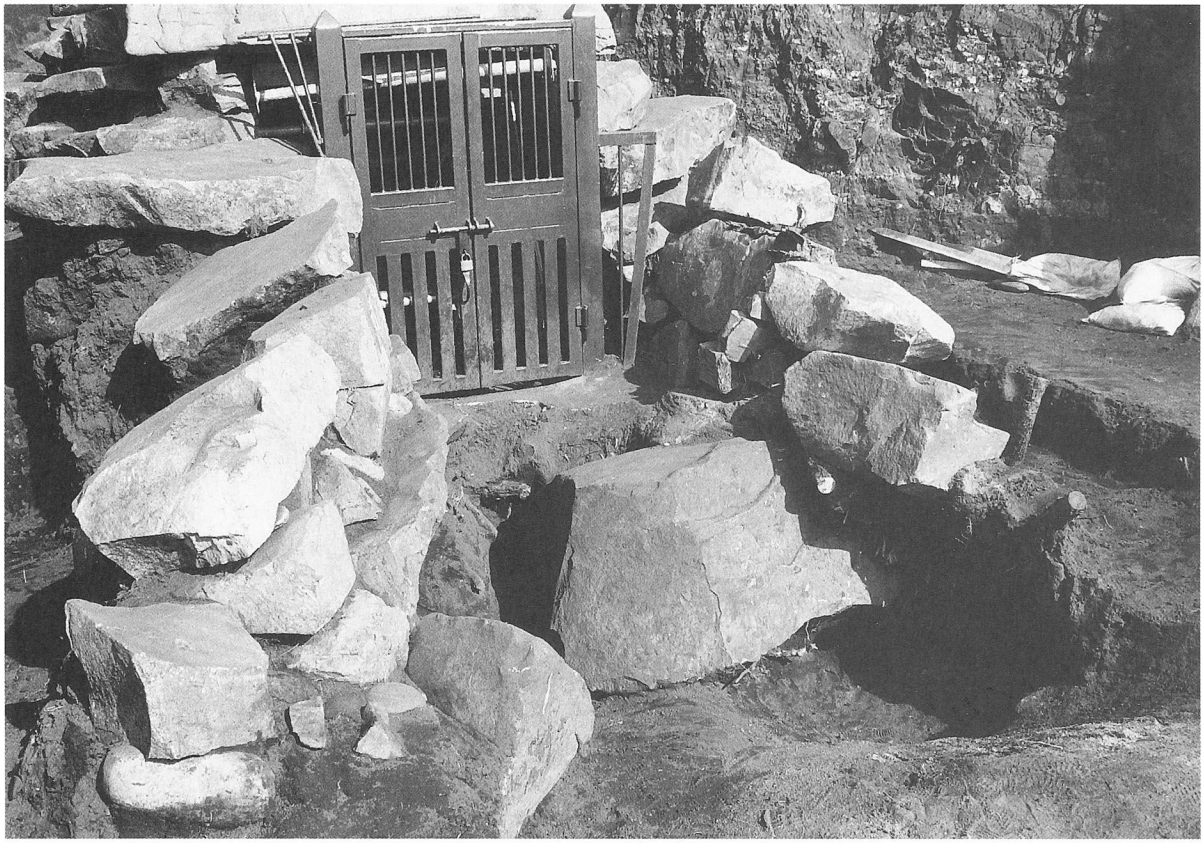
鬼の窟古墳石室羨道部

鬼の窟古墳玄室暗渠

鬼の窟古墳墳丘断面（南側）

鬼の窟古墳墳丘断面（南側）

図版6

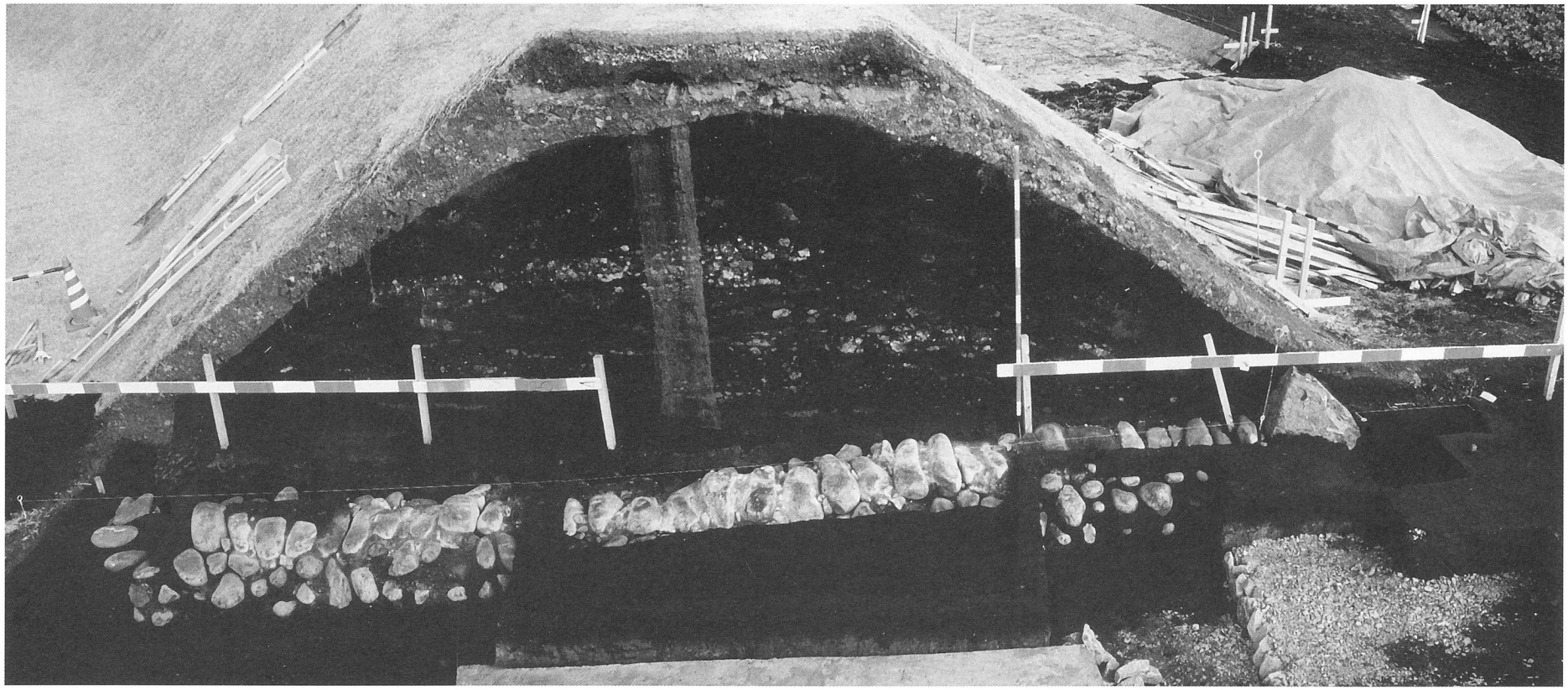


鬼の窟古墳石室墓道

鬼の窟古墳石室天井石

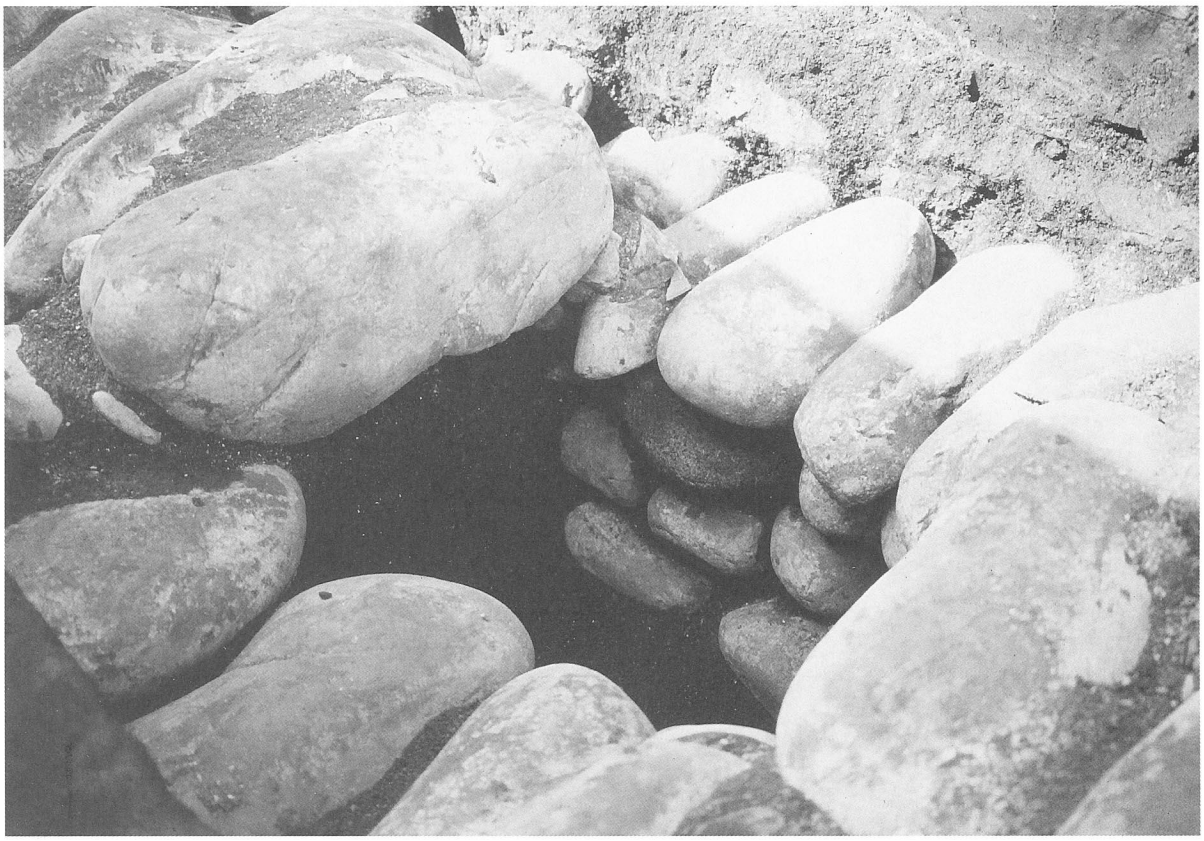
鬼の窟古墳石室裏込（西側）

鬼の窟古墳全景（整備後）



鬼の窟古墳外堤下暗渠

鬼の窟古墳外堤下暗渠



鬼の窟古墳外堤下暗渠

図版10

西都原205号墳周溝出土土器（a群）

西都原205号墳周溝出土土器（b群）

報告書抄録

ふりがな	おにのいわやこふん・さいとばる２０５ごうふん
書名	鬼の窟古墳・西都原２０５号墳
副書名	
巻次	
シリーズ名	特別史跡西都原古墳群発掘調査報告書
シリーズ番号	第１集
編著者名	長津宗重
編集機関	宮崎県教育委員会
所在地	〒880-0805　宮崎市橘通東1―9―10　ＴＥＬ0985―26―7251
発行年月日	2000年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
さいとばるこふんぐん 西都原古墳群	さいとし｣おおあざみやけ 西都市大字三宅 あざさかもとのうえ 字酒元ノ上	45208				平成７年 7月10日 ～ 平成８年 2月４日		こふんせいび 古墳整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西都原古墳群	古墳	古墳	鬼の窟古墳 横穴式石室 周堀 外堤 ２０５号墳 周溝	馬具・釘・須恵器 土師器 須恵器・土師器	

特別史跡 西都原古墳群発掘調査報告書 第１集

鬼の窟古墳
西都原２０５号墳

発行年月日　平成12年3月31日
発　　行　宮崎県教育委員会
編　　集　宮崎県教育庁文化課
宮崎県宮崎市橘通東1-9-10
印　　刷　田中印刷有限会社
宮崎市大橋３丁目110